Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2014」

入 賞 作 品

公益財団法人日本科学協会

業務部 国際交流チーム

目　次

≪優秀賞≫

櫻井　毬子……２
平原　紀子……３
石丸　大輝……５
難波千穂美……６
倉澤　正樹……８
宇佐美　希……９
佐藤　瑞貴……１１
池部菜々子……１２
松山　茜……１４
山根　芽依……１５
馬場　弘基……１６

≪佳作≫

松坂　茉留……１８
潮田　央……１９
中山　一貴……２１
小西　姫加……２２
岸　朱夏……２４
城塚　真衣……２５
三木　謙将……２６
門間　里奈……２８
入山　宥昌……２９
中島　大地……３０
中村　佑……３２
鈴木　美葉……３４
吉澤　法華……３５
大友　由香……３６
岡田　茉弓……３７
小川　智之……３９
石森　瑞希……４０
伊藤　洋平……４２

≪優秀賞≫

櫻井毬子

わたしの目に映る中国

（今度こそ、笑顔でさようならをしよう。）

そう心に決めていたのに、上海の空港で大学生訪中団としての７日間を共にした方々に、「再見！」と手を振ってくるっと背を向けた瞬間、こらえていた涙がどっと溢れてきた。中国――。そこは私にとって、日本に帰る時には思わず涙を流さずにはいられないほど魅力的で、「また行きたい」と思える場所だ。

この１年で私は３度中国に渡り、３度涙を流した。１度目は大連の友達の家から帰る時、大連周水子国際空港で。２度目はNPOのプログラムで内蒙古の草原に行った時、上海港から日本に帰る船の中で。３度目はこの夏、日中友好大学生訪中団の一員として北京、西安、杭州、上海の４都市をまわり、帰国の途につく上海浦東国際空港で――。３度の涙の成分を細かく分析することはできないが、異国の地で温かな交流ができた嬉しさと、お世話になった方々に充分なお返しができなかったことに対する後悔、もっと一緒にいたかったという寂しい気持ちが混ざり合った、熱い熱い涙であった。

昨年の夏、初めて大陸の土を踏んだ時からいまに至るまで、私がずっと心の中で温め続けている言葉がある。それは、「言葉が通じた嬉しさは一瞬で消えていくけれど、心が通じた嬉しさは一生消えずに残る」ということ。

もちろん、新しく覚えた表現をつかい、それが相手に伝わった瞬間や、中国語だけで会話が成立した時は、本当に嬉しいものだ。大学で中国文学を専攻する身としては、中国語は何としてでも話せるようになりたいし、通訳の方が正確に滑らかにお話している様子を見るたびに、ああ、私もあんなふうになれたらなという思いをつよくするのもまた確かではある。しかし言葉が通じなくても、ともすれば言葉が通じないからこそ、私たちは心を通わせることができる。そう確信した背景には、２度目の訪中の際に長距離列車で過ごした24時間の体験がある。

2013年９月９日夜７時過ぎ――。大学生を中心とする50人規模の団体で上海からフホホト（呼和浩特）へ向かう列車に乗車し、私は切符の番号を頼りに自分の寝台を探した。辿りついた寝台は皆とは少し離れたコンパートメントにあり、周りはすべて一般の中国人の乗客だった。比較的近くのコンパートメントにいた同じ班の大学院生が、まだ１年生の私がひとりになってしまうことを心配し席を換えようかと申し出てくれたが、私はむしろ中国人に囲まれた状況にわくわくしていた。日本にいる時、私は仲の良い中国人留学生たちの流暢な日本語能力に甘えてしまい、中国語の勉強をしたいと思いつつもつい日本語をつかってしまっていた。私は生まれて初めての、中国語しか通じないこの状況を楽しみたいと思った。

ふと顔を上げると、通路に立っていた背の高い男性と目が合った。彼がにこっと笑ったので、私も思わず微笑んだ。「どこから来たの？」。英語で訊かれたその質問に中国語で答えると、彼の目がパッと輝いた。「中国語、話せるの？」

それからは楊さんというその男性を中心に、同じコンパートメントの人たちと会話が弾んだ。不思議なことに、日本にいる時には自分から話すことの少ない私も、自分自身が驚くほど自然に話をすること

ができた。後で私たちのところに遊びに来た友人がいうことには、その時の私は日本語を話している時よりも明るく楽しそうに見えたという。きっと楊さんたちの優しさが私の心の中にあった不安や緊張をあっという間に溶かしてくれたのだろう。膝の上にはノートとペン。わからない言葉があればノートに書いてもらうと大体理解することができた。話をするうちに、楊さんたちは全員、内蒙古の検察官だということが分かった。一緒にトランプをしながら、「日本の検察官と中国の検察官はどういうところが違う？」とも訊かれたが、日本の検察官とトランプをしたことがない私には、その違いは説明できなかった。

そのうちに、私たちの盛り上がりを見た同じ班の友達がどんどん集まってきた。ほとんどが中国語を知らない大学生だったが、筆談で会話が成立し、意思疎通に成功するたびに歓声が上がり、笑顔が広がった。言葉はあくまで手段のひとつなんだな——。私は皆の笑顔に囲まれながらそう思った。同時に、これほどまでに皆が幸せそうなのは、本当は言葉が通じたからではなく、心が通じているからなのだと確信した。私はいまも、10 近いの筆跡が入り乱れたその時のノートを大切に保管している。そしてそのノートをめくるたびに、体中が温もりで満たされるのを感じることができる。

私は今年 20 歳になり、法的に「大人」になる。これからは自分自身が中国との関わりを持ち続けていくことはもちろん、子供たちにも、自分の目で中国を見て、中国の人々と生の交流をする中で、心が通じる喜びを味わってもらえるよう頑張っていこうと思う。数か月前、児童館での運動会準備を手伝った際、オリンピックを模して各国の国旗を飾りたいという子供たちに、「どの国の国旗を描きたい？」と訊いたことがある。その時、「中国！」と言った子がいたのだが、周りの子に即座に「中国はいや！」と却下されてしまった。私が「どうして中国はいやなの？」と問うと、暫しの沈黙の後、何となくという答えが返ってきた。

何となくいや——。相手のことを知ろうとせず、知りもしないのに嫌悪する大人の態度が、まだ心が通じる嬉しさを知らない子供たちの可能性をつぶしているとしたら、何と悲しいことだろう。相手を知ろうとする努力を継続していくには大変な労力が必要であることは間違いない。しかしその努力なくして、心が通じた嬉しさというかけがえのない財産を得ることはできない。日本の子供たちの瞳に映る中国が、偏見や固定概念によって形成された鏡越しに見えるものではなく、まっさらな状態で瞳の中に飛び込んでくるようになれば、熱い涙を流せる交流がいまよりももっともっと多く生まれるのではないかと思う。

平原紀子

「見えない脅威」と「見える友好」

「沖縄の人は中国が怖くないのか」。本土の人からよく聞かれる言葉だ。かく言う自分も本土出身で、沖縄には仕事の転勤で来ている。しかし住んでみると、沖縄には、地理的・歴史的経緯から、観光客や伝統文化など日常に隣人としての中国の存在がある。そうした友好の面を見ずして脅威ばかりを心配するのは、脅威が見えないものだからだと考える。脅威は誇張されやすく、それゆえ、より増大する。それでは冷え込んだ日中の両国関係は改善できない。脅威を論じる前に、まずは見える友好を評価するべきではないか。

たとえば沖縄の米軍基地。「基地に反対する沖縄の人は、沖縄を中国にとられてもいいと思っているのか」。沖縄の米軍基地が、中国に対する抑止力になっているとの考えから出る言葉だ。日米安保が仮想敵国の抑止力になっているのは事実。しかし、見えない脅威ばかりが先行して、仮想敵国をバッシングしなければ非国民と言われかねない時代が到来している。

沖縄では、米軍の新基地建設に反対する首長が、「中国のスパイ」としてインターネット上や街頭演説で激しく攻撃される。沖縄の「基地反対」にも、「即時閉鎖・全面撤去」から「新基地建設反対」など多様な主張があるが、国土の 0.6%の面積に在日米軍専用施設の 74%が集中するのはあまりにも過重な負担じゃないか、というのがおおかたの一致点だ。日米安保が守っているのは沖縄だけではない。基地負担を沖縄に押し付け、ほとんど引き受けて来なかった本土の人に、「中国にとられてもいいのか」などと言う権利はない。ましてや、「米軍は中国から沖縄を守ってくれているのに」などと沖縄の人が批判される筋合いもない。

では沖縄では中国に脅威を感じる人がいないのかというと、そうではない。聞かれれば、「怖い」「沖縄をとられるのは困る」と答える人もいるだろう。ただ、沖縄の人は地理的. 歴史的なつながりから、中国を本当の意味での隣人と捉えているように感じる。

たとえば観光客。2013 年に沖縄を訪れた中国、台湾、香港の観光客は約 36 万 8000 人で、同年の外国人観光客の６割以上を占める。今年はそれをさらに上回る勢いだ。街を歩いていても、そこかしこで中国語が飛び交っている。東京では「声が大きくうるさい」「行儀が悪い」などの感想をよく耳にしたが、沖縄では観光業に従事する人が多いからか、そのような感想はあまり聞かない。「歓迎光臨」の看板を掲げる店も多く、商品の説明などのため中国人スタッフを置いているところも少なくない。

観光以外にも、姉妹提携都市間の交流、伝統文化や慣習に見られる共通点など、「隣人」を目に見える形で意識する機会が多い。「見えない脅威」を感じるのは本土の人と同じだが、「見える友好」が存在するからこそ、本土の人ほど脅威が誇大化されないのではないだろうか。

自分が中国に興味を持ったのも、聞いていた「見えない脅威」と実際に自分で見た「見える友好」とのギャップを目の当たりにしたからだ。

2008 年にアメリカの大学に留学した際、マンハッタンのチャイナタウンを訪れた。大学の友人たちに言わせれば「チャイナタウンは危ない場所」だった。道に迷い、近くを歩いていた老女に「Excuse me?」と声をかけると、「No English. No English.」の一点張り。去りゆく老女に向かってとっさに出てきたのが、日本で少し勉強していた中国語の「请问」だった。

老女は驚いたように「なぜ中国語を話せるのか」「どこから来たのか」「なぜチャイナタウンに来たのか」などと、矢継ぎ早に質問を浴びせてきた。片言の中国語で返すと、先ほどとは打って変わって優しい表情になり、道も丁寧に教えてくれた。

どこの国のどんな人でも、自分が脅威と見なされていると、自ら友好的になろうとはしない。それならば自分の持つ空想の脅威をまずは脇に置き、こちらが友好的になることから始めるべきではないか。そう思わせてくれた体験だった。

この老女に会って以降、自分が中国に関心があるということを示すと、同じような反応が続いた。アメリカ留学中に出会った中国人留学生、日本で道を尋ねてきた中国人観光客、中国本土で白酒を飲んで「朋友」になる中国の企業幹部。そして、中国に関心があると言うと、すぐに仲間意識を持って打ち解け、若輩者の自分にさまざまなことを教えてくれた日本の経済界、学識経験者の先輩方。

民間交流だけで両国の冷え込んだ関係が改善できるとは思っていない。しかし、自分自身「見える友好」を大事にしてきたことで、両国関係をどうにかよくしたいという多くの人々と出会うことができた。自分の知る範囲内だけでも多くの仲間が存在する。そのネットワークを広げ、少しでも「見える友好」を大事にできる仲間を増やしていければと思う。

石丸大輝

「わたしの目に映る中国」　一衣帯水 - You 縁 Me -

中国はどんな感じでしたか――同窓会の場でそう聞かれると、私と同様に北京に留学していた友人がすぐさまこう答えた。空気がひどい、来てすぐ喉が痛くなって……、と。やっぱりそうなのだと頷く周囲。そこで私は思わず「でも雨あがりの晴天を見ると、その分すごく気持ちいいし、それに一説では、きちんとマスクをしていれば１日たばこ１本程度の害で済むみたいだから、日本の報道も大袈裟なところはあると思うよ」と述べた。そのとき、いつもは楽しく話を聞いてくれる友人の眼からさっと輝きが失われたような気がした。無関心をふと思わせるあの眼差しが今でも心に突き刺さる。人間というのは耳に入れたい情報だけを好んで聞きたがるものだというのはこのことかと実感させられた。

多くの人の眼に映る中国というのは、メディアによるイメージが強い気がする。少し前ならば、路上を大量の自転車が走っている光景であり、最近だと大気汚染に始まり、日本への抗議活動、鳥インフルエンザ、食の安全問題などネガティブな印象が支配的であろう。もちろんこれらの印象は間違ってはいない。実際私も最初は中国に対して良い印象を抱いてはいなかった。中国に留学したのも、東アジア諸国が集まる国際会議に参加した際、流暢な英語で意見を積極的に述べる中国人にライバル意識を燃やしたのがきっかけだったにすぎず、留学開始当初は中国語で意思疎通ができなくて、大学事務室の初老の先生に「バカ野郎」とまで罵られ、ホームレスにされかけたこともあった。このようなトラブルに見舞われ、私は憤慨すると同時に危機感も抱き、寝る間も惜しんで中国語の勉強に励むようになった。中国に素直に好意など持つ余裕もなかった。しかし、そんな私を大きく変える出来事が起きた。

日本への抗議活動が最も盛んだった 2012 年の国慶節のことだった。天安門で行われる国旗掲揚式を見るために、私は先輩と前日から徹夜で並んで待っていた。後ろには中国の国旗を振っている中国人学生団がいて、先輩とお喋りし始めた。私たちが外国人だと分かると「どこから来たの」と聞いてきたので、私は躊躇していたが、先輩は「私たちは日本人です」と先に答えてしまったのだ。私は一瞬びくりとしたものの、相手は顔色一つ変えずに会話を続けている。そしてしばらくして彼らは私たちにこう言った。「政府は政府。一般人は一般人。私たちの友好は絶やされてはならない」と。そうして夜更けの寒さに凍える私にコートまで貸してくれたのだ。コートに包まれた私に夜明けの光がさし、心の底からぬっくりと温まっていった。あの感動は今でも忘れられない。彼らからもらった中国国旗は、留学生活の最後まで、私の机の上にずっと飾られ続けた。

それから私はより前向きに行動するようになった。食堂に出かけ、相席になった人に積極的に「私は日本から来た留学生です」と話しかけては、中国語のトレーニングに付き合ってもらった。これからは中国人のことを信頼できる、そんな気持ちをもつようになっていた。

私が信頼を示すことで相手も信頼を示すようになるというのは、これまた道理であるのかもしれない。もともと人と接するのに垣根を作らず、すぐ懐に入り込む性格であった私は、中国人の友人とも同様の

付き合いができるようになっていた。ある日、仲良くしていた友人が実家に招待してくれて、家族旅行にまで同行させてもらった際、花火を見ながら、日中関係の過去と未来について語り合った。普段おとなしい彼女からは決して考えられないほど、赤裸々に話してくれた。また別の友人は、一人っ子政策が厳しいなか第二子として生まれ、両親が罰金を払うまでの間、ずっと祖父母のもとでこっそりと育てられてきたために、いまだに両親と心から触れ合うことができないと悩みを打ち明けてくれた。このような友人たちと出会うことができ、ここまで深い関係が築けたのも、全てポジティヴな気持ちで接してきたことの積み重ねのおかげなのかもしれない。

中国はどんな感じでしたか――この質問は非常に難しい。今の私なら、「多様性」に気付かせてくれた場所であったというだろう。多くの少数民族を有し、料理のバリエーションも豊かで、言葉や経済水準、身体的特徴、習慣も地域で大きく異なる。つまり、様々な側面があるのである。もちろん大気汚染が深刻なのも事実である一方、黄龍やチベット高原など世界有数の自然美を誇る場所があるのも事実。官吏の汚職が問題視されているのも事実である一方、政治的決断力の強さが経済発展を牽引しているのも事実。この多様性というものはどの国も多かれ少なかれ持っているものである。

では、この多様性のなかで、私たちは何を見て、何をしていくべきなのか。私は一民間人として、なるべくポジティヴな側面に目を向けて、お互いに信頼しあえるような関係を築くことが必要だと思う。そう考えた私は、東京大学と協力して中国学生交流ツアーを企画したこともあり、そのツアーの訪問先であった在中国日本大使館で、木寺昌人大使の「隣国は選べない」という言葉が心を打ったことを覚えている。日中両国が一衣帯水の隣国であるのも縁であり、この縁をどう生かすかは自分次第であるということだと私は理解している。日中国交回復の立役者、大平正芳氏は「21 世紀荒波が必ず来る、相互信頼の心を失わないでほしい」と言っていたそうだが、まさに日中の政治関係が未だ膠着状態にある今こそ、民間人である私たちは、中国に対するネガティブな印象一色に染まってしまうことなく、一衣帯水の縁に感謝し、お互いを信頼しあえるような関係を築くべきではないだろうか。中国に限らず、どの国にも善い人と悪い人がいるわけであり、その多様性を受容し、ポジティヴな態度で接することに徹していれば、日中友好の架け橋は自ずと浮かび上がってくると私は信じている。

難波千穂美

「暖かい中国」

大学３年生で、私は約１年間中国天津へ留学に行った。

私が中国へ旅立つ頃、日中関係は決して良いとは言える状態ではなかった。多くの親戚や友人は「今行っても大丈夫なのか、怖くないのか」と聞いた。私は、「きっと大丈夫だよ！日本に来ている留学生の友達はみんないい人なんだから」と彼らを安心させるため、いや、自分自身に言い聞かせるように言い、日本をあとにした。

毎日のようにテレビで報道される日本への抗議活動。正直なところ、不安はあった。

初めての留学、初めて自分ひとりで行った海外。あの時は、まだ中国をこんなに愛おしく思う日がくるとは、思っていなかった。

中国へ降り立った留学初日、大きな不安が優しさで包まれた出来事があった。

大きな荷物を抱え、初めてタクシーに乗った私は緊張気味の中国語で大学名だけを運転手に伝えた。大学に着いたが宿舎がなかなか見つからず、運転手は一緒にあちこち探してくれた。その姿をみた中国人学生も見ず知らずの私の荷物を持ち宿舎を探し回ってくれた。

結局、留学生宿舎が別校舎にあることを知ったときにはもう夜も更け、その学生は寮母さんに頼み、彼女たちの部屋に私を泊めてくれた。簡単な中国語で私に話しかけてくれ、彼女たちの優しさで、空港に降り立った私の不安は気づけばなくなっていた。

次の日、自分が食べるはずだった朝食のパンを私にもたせ、見送ってくれた。６人部屋で、温かい優しさに包まれてぐっすり眠ったあの夜と、彼女たちをこれからもきっと、ずっと忘れない。

こうして幕を開けた私の中国留学は、こんな優しさに何度も何度も助けられた。

テレビの中だけで見る海の向こうの国、昔喧嘩をした国、いろんな想いをそれぞれが抱いている。でもほんの一歩の歩み寄りが、その長年抱いてきた思いですらも変えていけると思えた出来事もあった。

まだ留学が始まって間もない頃、道端で困っているおばあちゃんと出会った。その人は私に「荷物が多すぎてひとりじゃ帰られなくなったから、息子を呼びたいの。電話を貸してくれる？」と私に声をかけてきた。とっさに「財布や携帯はきちんと管理すること」と口酸っぱく言っていた先生の顔が浮かんで、すぐに私は疑いの目で彼女を見た。言っていることはわかったが「ごめんなさい。中国語がわかりません」と嘘をついてしまった。

しかし、本当に困った様子に見えたので、携帯を貸してあげると、息子さんに電話を掛け、何度もありがとう。ありがとう。と、すぐに電話を返してくれた。私は、疑った自分を恥ずかしく思った。「あなたどこの国から来たの？あ、韓国人でしょ！」おばあちゃんは、とても優しい笑顔をして、私に聞いた。私は日本にいる祖父母の顔が浮かんだ。私の祖父母は日中関係をよく思っていなかった。テレビの報道をいつもしかめっ面で見ていた。

「きっとこのおばあちゃん、私のおばあちゃんと同い年くらいだな。もしかしたら、日本のこと嫌いかもしれない。私、日本人だって答えて大丈夫かな」という不安が出てきた。

でも、おばあちゃんの笑顔を見て、嘘はもうつけなかった。「日本人です」。私がそう答えると、少しの間があいた。日本人と答えたことを後悔し始めたとき、「まぁ。日本人だったの。ごめんね。気づかなかったわ。本当に助かったよ。優しいのね。ありがとう。ありがとう。本当にありがとう」。おばあちゃんは満面の笑みを浮かべ、そう答えてくれた。

寮への帰り道、私は、何度もおばあちゃんの笑顔を思い出しては、自然と笑みがこぼれた。

あの、おばあちゃんが日本をどう思っていたのかはわからない。でもこの日の出来事で、日本人の印象がほんの少しでも温かくなってくれていれば、すごくうれしいと感じた。この日を境に、私は「日本人」だと答えることをためらわなくなった。私が中国に居られるわずかな時間のうちに、たくさんの中国人の心に日本人と過ごした温かな記憶を残したかった。

そんな想いが報われた思い出がある。学校の長期休暇を利用して、留学生の友人と２週間の中国旅行をした。いろいろな中国を見て、たくさんの中国人と一期一会の出会いをした。

その中で、国内旅行をしていた中国人グループと仲良くなり、夕食を共にしたことがあった。年齢も性別も出身地も違う、出会って数時間の友人たちと「私たちは、もう家族だ。新しい家族に乾杯」。そう言って、お酒を交わした。

帰り際、その中の一人が私にそっと近づいてきてつぶやいた。「本当は、日本人が嫌いだったんだ。でも君に出会って、日本を好きになった。これは、私の旅行で一番の収穫だった。本当にありがとう」。星がにじんで見えたこの瞬間、私にとってもこの旅行で一番の思い出となった。

たくさんの優しさで支えられた私の留学生活はあっという間に終わりを迎えてしまった。

目を悪くしてしまい、急きょ１カ月ほど前倒しで帰らなければならなくなった私を、この留学で出会ったたくさんの友人が、忙しい時間をぬってお別れに来てくれた。

涙を流して出会えたことを喜んでくれた友人たち。「おねえちゃん！といつも慕ってくれた、中国で出来た私のかわいい妹。いつかまた、彼女たちに会いに行こうと思う。

日本に帰ってたくさんの人に中国について聞かれる。私はそのたび、「中国は、すごく暖かいところだったよ」と答える。祖父母にも、中国人がどんなによくしてくれたかをたくさん聞いてもらった。ニュースを見ている祖父母の様子が最近ちょっと変わった。「こういうニュースってほんの一部分が映ってるだけやもんね」。そう言って、私をみた目はとても優しかった。

日中友好のために何かをするというのは、すごく難しいことのように感じていた。でも、それは、お互いのほんの一歩の歩み寄りで広がる輪ではないかと今は感じる。

私も、その輪を広げられるように、自分の経験や想いを自分のまわりから広げていこうと思う。

倉澤正樹

私にとっての中国　～信じて古を好む

「中国や中国人に対する思い」を語ろうとして、私は率直に言ってためらいがある、ということを冒頭で述べさせていただきたい。思うに、「中国」や「中国人」が「ある」と思った時点で、既に「中国」や「中国人」を捉え損なっているのではないか。これは禅問答であり、禅問答ではない。

私の印象に残っている中国映画の一つに、陳凱歌の「黄色い大地」がある。これを「プロパガンダ」と見たら、もはや既に忽然として本質を見失っている。第一、これだけの名作に対して無粋であり、失礼であろう。そこに人がいて、素晴らしい文化がある。なのに、自分の掛けている色眼鏡を通した風景こそが正しいとする。そのような人は、いつまでも本物の人や物に触れることはできまい。

冒頭でかくも長々述べざるを得なかったのは、日本の巷間で流れている「中国」や「中国人」というイメージに、私の心が疲れていたからだ。私は本物を掴みたい……。

元来、「中国」はあらゆる面で多様性に溢れている。民族的・言語的・文化的・経済的・人間的……。私はこれまで、北京と上海しか訪れたことがない。私が知る「中国」は、まさに点でしかない。

北京で 6 人部屋に泊まった時、広西出身で北京にはるばる旅行に来ていたチュアン（壮）族の大学生２人と話した。列車での片道は、ほぼ 24 時間かかったという。そして、北京の物価の高さに驚いていた。地元の物価の 5 倍近いという。彼は真っ直ぐな眼で、気さくに見知らぬ「日本人」である私に話しかけてくれた好青年であった。そして、彼と私の会話の間に、「日本人」も「中国人」も無かったように思う。彼はただ良心的な一青年、というだけである。

ブラウン管を通し、自分の外側のものとして「中国」・「中国人」を見るから、おかしなことになる。実際に行って笑顔で話し合い、食事をし、自分の考えを真剣に語り合えば、もう「中国」・「中国人」などという意識を、既に忘れている自分に気づく。こういう体験がたまらない。

私は中国思想を専攻する大学院生である。中国古典を読むのは、私にとって決して簡単なことではない。しかし、「信」があれば、挑戦し続けることはできる。私は中学生の時、『史記』を読んだ。司馬遷・伍子胥・屈原……古にはすごい人がたくさんいる。彼らは自分から私のもとに降りてくることはないが、私が彼らを尋ねれば、温かく迎えてくれる、という「信」が私にはある。彼らは生易しい先生ではない。心から尊敬し、頭を深く下げ、省みて己の卑小さを思い、彼らに近づかんとして発奮するのである。かくして、彼らは現世の誰とも比較不可能な無二の師となる。

古典は過去の遺物に過ぎないのだろうか。安易に古典を現代社会と直結させる態度は、古典に対する真摯な理解を追究する上で、厳に慎むべきと思う。一方で、やはり漢字文化圏の古典の共有は、今日の日中関係を考える上で重要な遺産ではないだろうか（ここには韓国も含まれる）。思うに、ある国に対して古今を問わず、たとえ一人でも心から尊敬し交わりたい人物を、己の心の中に持つことができれば、その国を軽んずる心は抑制されるのではないか。「国」は外から見たとき、一緒くたに塗りつぶすことで生じる概念であるとすれば、その中に一点でも、畏敬すべき古典の光を灯すことができれば、と私は古典の可能性を信じ…たい。長期的になされる、目に見えない形での文化交流の伝統の蓄積の可能性を。

「信而好古」という言葉は、中国の人との交流で感じたことが多い。人民大学を訪れた時のこと。ある学生に対し、私が明末の李贄の思想を専門に研究していると自己紹介したところ、翌日彼女は李贄の『焚書』を持って来て、私に示してくれた。満足に語ることはできなかったが、不思議なことに、私は大変に歓迎されたような気がした。別の学生は私の専門を聞き、別れに際して銭穆の『国史概論』を送ってくれた。全ページに渡って詳細に読み込まれた痕跡が残っている。ありがたかった。また、北京の友人と北海公園の湖を散歩していると、彼女はすらすらと白居易や蘇軾の西湖にまつわる詩を暗誦し、柳と蓮と湖の風景の見方を教えてくれた。言われるまで、湖がなぜかくも中国の人々の嘆賞の対象となり、いくつも造園されてきたか、など全く考えなかった。古の詩を学ぶことで、世界の見え方がより繊細になり、文化伝統の蓄積の謎を解き明かしてくれる。

一人、中国の古典を読むことは、基本的に孤独で、誰のためにも何のためにもならない営為だと思ってきた。日本社会に身を置く限りは、基本的にそうであろう。しかし、中国社会に身を置けば、古典を読むことが人との出会いにつながる。そんな出会いに触れると、自分の生きてきた道は間違ってなかった、と嘆ずることがある。更なる出会いのために、私は「生乎今之世，反古之道」という道を、信じて歩み続けたい

宇佐美　希

日中の懸け橋をめざして

私が中国に関心を持ったきっかけは、高校在学中に起こった日中間の「島」を巡る領土係争だ。それからどんどん日中関係が冷え込んでいくのを見て、「今の日本と中国にはパイプ役となる人が十分にいるのだろうか。私自身が日中の懸け橋になりたいし、懸け橋となる仲間を増やしたい」と思うようになった。それ以来、日中間で歴史認識・領土問題について率直に討論する学生フォーラムを開くのが私の夢である。

高校時代までは中国人との関わりが全くなく、テレビの偏った報道を見て漠然と「中国人ってよくわからないけど怖いのかな。私たちと違うのかな」と思っていた。しかし、大学入学後、本当に仲の良い

中国人の友達ができ、中国語を教えてもらったり、一緒に旅行にいくうちに、以前のような漠然とした中国へのネガティブなイメージはなくなった。仲の良い友人ができたことで中国人と分かり合いたいという気持ちが一層強くなったのだ。国として様々な問題を抱えていることはたしかだが、だからといってそこに暮らす人々にまで偏見を持ちたくないと思うようになった。その友人に「テレビで放送されている日本に抗議する暴力的なデモなんか、ごく一部の中国人しかやらないよ。真に受けて中国を嫌いになったりしないで欲しい」と真剣な顔つきで言われたことは忘れられない。また、親しい中国人や韓国人の友達と、夜中に領土問題や教育問題、歴史認識や各国の政治のあり方について語り合うこともしばしばあり、その際相手に配慮しつつ自分の意見や疑問点をぶつけられるのは、社会的に重要な立場がなく、経済的利害関係のない学生ならではだ、と痛感した。デリケートな問題だからこそ、相手を傷つけないように配慮をしながら、積極的に話し合っていくべきだ、という自分の考えが更に強くなった。

友好的な中国人の友人たちに共通しているのは、皆幼少期は学校や大人たちの「日本は悪い」という一方的な話に染まっていたが、日本のアニメや漫画などの文化に興味を持ってから日本を好きになり、日本と自国の政治的関係にも関心を持ち始めたということだ。私はこれまで文化交流を甘く見ており、直接政治に働きかけなければ今の日中の冷え込んだ関係は何も好転しない、と考えていた。しかし、子供や若者にとって、難しい理屈をこねて日中友好を説くより、アニメや漫画などをきっかけに「この言葉を勉強したい！」「この話の舞台に行ってみたい！」というワクワクした気持ちで日本に興味を持ってもらうことの方がずっと易しいし、何より楽しい。今までの私のように眉間に皺を寄せながら政治的問題にばかり向き合うのでなく、「相手の国が好きだ、相手を知りたい。」というポジティブな気持ちを育てることの大切さに気づいた。

先日は、虎の門ヒルズで行われた第 10 回東京—北京フォーラムの政治対話を傍聴した。政治対話の場を作る際の参考にするための勉強に行ったのだが、討論した際に突っ込まれるポイントなどのメモをとる手が止まらなかった。前から 3 列目の中央付近に座っていたのも幸いしてか、質疑応答も当てていただき、東京外国語大学中国語科の大先輩をはじめ、様々な方々とお話ができ、非常に有意義な時間を過ごせた。日本人と中国人で政治対話をすると大抵水掛け論になり、話し合いが平行線で終わってしまう、というのは私自身の悩みでもあり、他の日中交流団体の方々からもよく耳にする話である。対話で何も得られなかったような気持ちになってしまい、この対話に何の意味があったのか、続けていく価値はあるのかと葛藤することも多かった。しかし、フォーラムに参加し、日中の知識人同士でも水掛け論になったり、思わず感情的になる場面に出くわしたり、最後に中国側の司会者が「今回の対話で得られた合意はなにもありませんね」と言って笑いを誘っているのを見ると、必ずしも毎回の対話で合意や成果を求める必要はないのだということに気づかされた。プロの政治家や知識人でも合意を得ることは難しいし、何をもってフォーラムを成功とみなすかの明確な基準はないのである。水掛け論になるのは免れないと割り切って、相手がどうして自分と違う考え方をするのか、共存するのに何が必要か、それを対話する場をつくることが大切だ。また、フォーラムは単発ではなく、定期・長期的に開き、各回の成果や話し合いの内容を記録・発信し続けていくことの必要性も感じた。相手と意見交換をする機会を頻繁に持ち、対話を目に見える形に残して反省を重ねていけば、冷え込んだ日中関係も改善されていくと信じている。

私は現在、京英会という日中交流の学生団体に所属しており、このたび次期代表に任命していただいた。私の熱意が現在の代表に伝わり、1 年生にも関わらず大役を任せようとしてくださるのは大変あり

がたいし、責任を感じている。「日中のパイプになる仲間を増やすため、定期的なフォーラムを開く」という高校時代からの夢を実現させるために今は企画中だ。大学生活も中国語学習も始まったばかりだが、日中の懸け橋となれるよう日々邁進していきたい。

佐藤　瑞貴

日中関係改善のための提案

日中関係の未来はまさに私たち若い世代にかかっています。頻繁に目にする関係悪化のニュースによって、日中間の問題は乗り越えられないのかと日本国民は絶望させられています。しかし日中関係改善のためには両者が歩み寄らなければ何も進展しません。習近平国家主席と安倍首相による日中首脳会談は実現されないまま長い月日が経ってしまいました。最近では 2014 年 11 月に開催されるアジア太平洋経済協力会議で日中首脳会談が実現する可能性が高いとメディアでは報じられており、私は非常に期待を寄せています。

しかし、関係改善のために歩み寄るべきなのは両国の政府同士に限った事ではありません。むしろ政治的、軍事的にうまくいかない日中は別の側面から歩み寄りを図ることが望ましいと思います。二国関係が冷え込んでいるときこそ、民間の交流を活発に続けて互いを理解する気持ちを大切にしていくべきです。そこで私は３つのことに注目し、関係改善のために提案したい事があります。一つ目は中国人観光客、二つ目は少子高齢化社会、三つ目は環境問題です。

まず一つ目の中国人観光客です。日本観光局のデータによると 2014 年 8 月には昨年度比 56%増加の 25.4 万人もの中国人観光客が来日しました。日中関係は悪化の一途を辿っていますが、円安や格安航空会社の就航に後押しされて訪日中国人はここ最近激増しています。実際に日本に来てもらうことで、日本の伝統文化からポップカルチャー、習慣、日本人の人柄も肌で体感してもらう絶好のチャンスとなっているはずです。また私が特に驚いたのは中国人団体観光客が一人一つ、日本のメーカーの炊飯器をお土産用に持っているのをターミナル駅で見かけた事です。日本のメーカーの品質が信頼されているという事も忘れてはなりません。想像のみで日本人の姿を思い描くだけに留まらず、実際に来日して日本人と触れ合い、日本の質のいいサービスや製品を知ってもらって日本を好きになってもらいたいです。

二つ目の少子高齢化は日中両国とも頭を悩ませている問題です。日本は既に人口減少が始まり、一方で 65 歳以上の高齢者人口は 25%を超えています。今後も高齢者が占める割合が増え、介護を必要とする高齢者の数もさらに増えて行く事となります。中国は今や世界一の人口を誇っていますが、生産人口は既に減少し始めており、15 年後には人口が減少し始めると言われています。恐らく日本と同じように少子化の中で要介護の高齢者人口が増え、その上一人っ子政策により若い世代一人当たりの介護の負担が大きい事が問題をより深刻にしています。日本ではある程度介護施設や介護のシステムが整備されていますが、中国では儒教の教えに基づいて介護は自分たちでやるという意識が根強いために未だに身内で介護をする事が多く、ただでさえ負担は大きいものです。未来を担っていく若者たちにとって両親や祖父母の介護は通れない道で、高齢化対策において日本が協力できるところがあるに違いないと思います。厳しい状況にある中国に日本の介護ノウハウを共有、或は相互に情報交換が出来れば若者同士が共通の課題に意識を持って取り組み、お互いに歩み寄るきっかけになれると思います。

最後に三つ目の環境問題においての日中間の協力です。中国では現在 PM2.5 による大気汚染に悩まされており、都市部ではマスクや空気清浄機なしには生活できず、多くの人が呼吸器系を患っているとニュースで報じられているのを見ました。日本もかつて高度経済成長を迎えた時代に公害でたくさんの人が苦しみましたが、高度な技術を以て環境に優しい国へと成長しました。そこから得た学びは今の中国の PM2.5 にも生かせるはずですし、日本の技術を生かして大気汚染が改善されれば中国の人からの信頼も得られると思います。何より日本は中国の東側に位置するために PM2.5 が九州地方等へ飛来してきており、PM2.5 の対策は中国だけに留まる事ではありません。日中両国の大気を澄んだ状態で保つためにも、共に手を打って行きたいです。

最後に、私たちが知っている互いの姿はメディアを通して見たごく一部でしかないと思います。日中間での衝突のニュースが流れるたびに私たち日本国民の間では嫌中や反中の感情が高まっていると感じるように、中国でも日中間の問題が報道されるたびに日本に対する悪い感情が高揚していることでしょう。私たちは報道に煽動されてしまって互いの本当の姿が見えなくなってしまっているのではないでしょうか。いよいよ来年、2015 年には終戦 70 周年を迎えます。これまでにも散々取り組んできた歴史認識の相違はなかなか解決せず、もはやこの壁を乗り越える事はとても難しい事と思います。しかし戦争を直接経験していない若い世代は、戦時中の痛みを知らないが故に先入観を持たずに関わっていく事が出来るはずです。政治的、軍事的には対立していても民間の個人レベルでの交流を活発にしていかなければ心は離れて行くばかりです。それに、お互いの心が通っていれば日中間で何か起こってもお互いに排外的なナショナリズムが煽り立てられる事は無いと思います。東アジアの二大経済大国である中国と日本が良好な関係でいられる事が地域全体の安定につながるに違いありません。1972 年の日中国交正常化の際に首相を務めた周恩来が残した言葉に次のようなものがあります。「若い人で、何度かつまずいたり、障害にぶつかったりしない者はいない。しかし、障害にぶつかっても落胆してはならない。いちばん苦しいときでも、気を落としてはならない。前進を続ける気概をもて。勇気をもて。希望の光が、我々を照らしている」。日中両国は何度となくぶつかってきました。しかし、希望の光が私たちを照らしているはずです。きっといつか両国にまたがる問題を乗り越え、良い関係を築く事が出来る日がくることと信じています。

池部　菜々子

私の中国色

「今日も電車の中で中国人が大声でワーワー電話してたよ。あの国にマナーって言葉はないのかな」と私の父はよく口にする。高校生の私は父と同じ考えを持っていた。おまけにいつも怒っているようで怖いとも思っていた。

なぜ中国人はうるさいのか、なぜマナーが悪いのか、なぜあんなにも我が強い性格なのか。これらの疑問や懸念は私の心の中で渦を巻き、中国に対するイメージを真っ黒に染めていった。

しかし大学１年生になった私は著しい経済発展を遂げる中国に興味を持ち、第 2 外国語を中国語に決めた。経営学部として中国から目をそらして勉強していくことは不可能に近いと感じたのも事実だ。それがきっかけで中国文化などについても積極的に勉強するようになった。私はこれまで何となく避けていた中国と向き合うことを決めたのだ。

ある日、中国語の授業で先生が教えてくれた。「多くの日本人が中国人はうるさいとか、いつも怒っていると思っています。けれどそれは違います。中国語には四声があるため幅広い音程を使って話すのです。一方で日本人はある程度決まった音程で話します。この違いがうるさいと感じさせてしまうのです」。その言葉を聞いてから街で中国人を見かけても怖いと感じることはなくなった。私にとって異文化を理解し、受け入れた瞬間だったのかもしれない。マイナスイメージの最も大きな原因が取り除かれたあと一層中国への興味が深まり、中国語を勉強したい気持ちが強くなった。高校生の時に私の中で存在していた真っ黒な中国は次第に色を取戻し始めていた。しかし、まだ完全に色を取戻すことはできなかった。メディアから日々こぼれてくる環境問題や食品の衛生管理問題、領土問題、日本への抗議活動が黒いしずくとなって私の中の中国に一滴一滴染み込んでいったからだ。

大学 2 年生の夏休みに中国の北京に 3 週間の短期留学が決まった。やっと自分の目で中国を見ることができる嬉しさと新たな生活への不安が入り混じった気持ちになった。留学の報告を友達や親戚に伝えると心の底から喜んでくれる人は少なかった気がする。私自身の体や生活環境などについて心配する声が多かった。その時私は感じた。日本人の心の中にある中国は黒いしずくに支配されていると。

拭いきれない不安を抱えたまま私は中国へ旅立った。入国した時からとても怖かった。どうしようもない恐怖が体中を駆け巡っていた。その原因は自分でもわからない。住み慣れた日本を離れた寂しさだったのかもしれない。少しも想像できない中国での生活への心配だったのかもしれない。言語が違うことへの孤独だったのかもしれない。

この恐怖がなくなっていったのは留学生活を始めて 5 日目のことだった。友達の紹介で大学の広場でコマなどのおもちゃで遊んでいる 1 人のおじいさんに会ったのだ。彼は孫が 2 人いて日が暮れて涼しくなると毎日一緒に大学の広場に来るという。彼は笑顔で自分のおもちゃを貸してくれた。遊び方やコツを教えてくれて上手くできると手を叩きながら「很好！很好！」と言った。初めて会った異国の若者にあんなにも親しく接してくれるその優しさで私の恐怖心は知らぬ間に消えてなくなっていた。

それから中国での生活は優しさと温かさで溢れていた。声をかけてくれる人や、道を教えてくれる人からは日本人にはない優しさや親しみやすさを感じることができた。ある日夜遅くに道に迷ってしまい地下鉄の駅を探していたことがあった。その時に声をかけた 40 代くらいの男の人は道を教えるだけではなくて一緒に駅まで連れて行ってくれたのだ。駅までの道のりでも日本に行って富士山を見たときの話や、自分の娘が最近誕生日を迎えたことなど話してくれた。道を聞いただけのつたない中国語しか話せない外国人にこんなにも親しく話してくれるなんて思ってもいなかった。もし自分が日本で道に迷った外国人に出会ったときに同じことが出来るかと考えたら、きっと無理だろうと思った。これが中国人の国民性なんだとはっきり感じた。高校生の時にうるさくて我が強いと思っていたことが急に恥ずかしくなった。メディアを鵜呑みにし、日本にいる中国人だけで国を判断していたことを謝りたいと思った。こんなにも温かく、おもしろく、力強い中国を肌で感じた私は日本に帰ったら必ずこの目で見たことを伝えるんだと強く心に決めていた。

私一人の中国に対する見方が変わったからといって、日本を蝕む中国への黒い情報をすべて消し去ることはできない。今日もメディアなどからこぼれる黒いしずくが日本人の心の中にある中国に少しずつ染みわたっている。しかし私はそのしずくを中和できるだけの鮮やかな色を持っている。どれだけの人に影響を与え、どれだけの人の中国に色を付けられるかわからないが、それでも私は自分の目で見たこ

とを伝えたいと思っている。色を持っている人が一人でも多くなればいつか両国が歩み寄れる日が来るかもしれない。

「中国どうだった？大丈夫だった？」多くの人が聞く。迷わず私はこう答える。「うん。すごくいいところだった。良い人が多くてさ……」聞いた人の心の中国に私は色をつけていく。かつて真っ黒だったとは思えないくらい、今の私の心の中の中国は鮮やかに色彩を放っていた。

松山　茜

わたしの目に映る中国

父と母は、私がものごころついた頃から喧嘩ばかりしていた。夫婦というものは仲が悪いものだと思っていた。友達の家に初めて遊びに行って、冗談交じりに会話をする友達の両親にカルチャーショックに近いものを受けたのを今でも覚えている。

私は、「日本」の千葉県稲毛区にあるたじま産婦人科で「中国人」として生まれた。生まれてから帰化するまでの 11 年間は、日本に住む中国人の女の子として生きてきた。小学６年にあがるころ引越しをする機会があり、それと同時に国籍を日本に変えた。いつからとははっきりしないが、私の中での日中コンプレックスが強烈に強まっていったのはこのころからだったように思う。母の実家は雲南省の昆明というところにあるのだが、帰省すると、近所の子供たちに「やーい日本人」と石を投げられた。

日本にいても、ほかの子達とは違う。両親の話す日本語はたまに違和感を覚えることもあったし、小学校の三者面談も、授業参観も、懇談会も、全部いやでたまらなかった。母はどうして私を日本で生み、育てたんだろう。私は何なんだろう。常に日本の文化の中で生きてきたけれど、日本人じゃない。じゃあ、中国人？ 自分の祖母ともろくに意志疎通できず、母の通訳に頼り、実家に帰るたびに周りからはよそ者扱いされる。日本人にも中国人にもなりきれない、私はいったい誰なの？ 誰？ 誰？ 誰？

私のこの日中コンプレックスに更に拍車をかけるものとして両親の、対極にあるといっても過言ではない中国観の違いがあった。私の父は田舎で生まれ、田舎で育った。それは、未開といってもさしつかえないような環境だった。そんな環境の中で父はひたすら勉強、勉強の毎日だった。父は日本に留学し、若くして日本政府のもとで働いていた時期もあった。そして現在では大学の教授をしている。父の地元では、帰省するたび、それはそれはスターのような扱いを受けるらしいが、それも想像に難くない。父がなぜ、留学先に日本を選らんだのか聞いてみたことはないが、中国のことを話題にするときはいつもマイナスなところを拾っては攻撃する。幼少期に育った環境が、父の中の中国に対するイメージの土台となっているからかもしれない。日本では想像もできないほどの田舎から、世界に飛び立ったという経緯を考えてみれば、もしかしたら苦労、苦労の連続だった記憶が、そのまま中国に対する嫌悪感に結びついてしまったのかもしれない。

対する母はというと、父とは真っ向から対立する親中派なのである。母は大学では文化人類学を専攻しており、世界中の異文化を勉強していたようだ。そうして母もたまたま日本に留学し、たまたま父と出会い、たまたま私が生まれた。

私からみると、母は中国に友人が多く、果てしなく広い中国のあらゆる場所に目を向ける機会がある。悪いところもあればもちろん良いところがあり、それらの要素が複雑に作用しあって母の中の中国観を作り出しているように思う。母は父に比べて中国という国を見るうえでの判断材料が多いのだ。

思春期の私には、対立する二人の中国への思いはただ単に私を混乱させ、中国に対するコンプレックスを助長しただけであった。

今、私は無事に明治大学の一年生になった。大学生というのは、これからの残りの人生の中で最も自由度が高い時期だ。やりたいこと、みたいもの、知りたいこと、そんな欲求を満たす最大のチャンスだ。

私はずっと日中コンプレックスに苛まれながら、モヤモヤした気持ちを抱えて生きてきた。母の話を聞けば中国を好きになれたし、父の話を聞けば中国を嫌にもなった。そんな風に私の中の「中国」は常に揺れ動くままだった。私は自分の目で、自分の体で、中国という国を感じ取りたい。その先でみた中国ががっかりするものだったとしても、目を見張るようなすばらしいものであったとしても、どちらでも構わない。大事なのは、自らの目で確かめることなのだ。人に振り回されない自分なりの健全な見方と考え方を持てるようになれば、いつかこの日中コンプレックスからも解放される日が来るのだろうか。いや、来るに違いない。そう願いたい。

山根　芽依

上海–思い出の匂い

「あっ上海の匂い」。辺りを見回すとプラタナスの樹がある。私にとって中国というと真っ先に思い起こされるのがこの匂いだ。

私は父の転勤で、小学生の３年間、上海に住んでいた。上海の街中いたる所でこの匂いを嗅いでいた。日本に帰ってからも、時々この匂いを嗅ぐことがあると決まって上海を思い出す。

上海にはいろいろな「匂い」があった。それは単に鼻から嗅ぐ匂いというだけではなく、様々な風景が持つ匂い。つまり私の思い出である。楽しいもの、驚くもの、悪いものが混ざり合う３つの「匂い」――庶民の暮らしの匂い、水の匂い、そして食べ物の匂い。これらを思い出しながら、上海を通してこれからの中国と日本を考えてみたいと思う。

テレビに映る上海は、高いビルが立ち並ぶ都会のようだが、その一角には、窓から長い竿に洗濯物をぶら下げた庶民の暮らしが渾然一体となって存在している。しかしその庶民の暮らしの中には、裕福ではなくても大声で笑いあう人々の匂い、今の日本では失われてしまったゆったりした時間の流れがあった。そして換気扇から吐き出される香辛料の匂い。ネズミが走る路地裏の湿った水の匂い。水の匂いと言えば、普段私たちが使っていた水道から出る水も、匂いと色がある強烈なものだった。住んでみてまず驚いたことだ。日本で水道水といえば、飲めて、そのまま使えるのが当たり前だったから最後まで慣れることは出来なかった。これだけ経済が発展している国なのだから、水道水を何とかできないのかと今でも思う。

中国は今、世界第２位の経済大国になっている。その中で上海は当時の小学生の私から見ても、光と影、富と貧が同居している町だった。超高層マンションに住み、高級外車に運転手付きで乗り、身なりも洗練された中国人。一方で、湯気の立ち上る蒸籠で焼売を売っている人。重たそうな毛皮を肩に担いで歩き売るウイグル族の人。後者は人懐こい笑顔で話しかけてくれる人たちだったのだが、身なりからするととても質素な暮らしをしているようであった。地方から出稼ぎに来ている人が多く、私の通学バスのガイドさんも故郷に子供を置いて、働きに来ていた母親だった。私が一番ショックを受けたのは、物乞いの少女だ。地下鉄で座っていた私達家族の前に正座をして何度も頭を下げ、お金をくださいと手

を差し出した。少女の姿は今でも脳裏に焼き付いている。同い年ぐらいの少女がなぜこんなことをしなければならないのか。当時はかわいそうというよりも、恐怖を感じた。日本でも貧困の問題はあるが、物乞いをする子供は見たことがない。この子供たちは学校へ通えているのだろうか。今はどうしているのだろう。少しでもあの時より幸せでいてくれたらと思う。

16 歳の私が偉そうなことは言えないが、このような貧しい人たちはとても狭い世界しか知らないで生活しているのだと思う。現状が当たり前、習慣だから仕方がないと思って生活していることが最も大きく、またさまざまな問題にも通じている。水道水も、もっときれいな水に出来るかもしれないという事を知らなければ改善されない。たとえば日本には飲めない水を飲めるようにする技術を開発している企業があることを、テレビで見たことがある。この技術を生かして上海の水道からきれいな水が出るようにすることはないのだろうか。また貧富の差については、気づき始めた人がどんどん声を上げ始めているのが今の中国だ。若い世代の中には、日本が昔からずっと悪いことをしていると思い込んでいる人もいるようだ。

一方日本でも、中国に対してのイメージは決してよくない。よく知らないからだ。実際に今日本に住んでいたら、そう捉えずにはいられないだろう。現代のような大衆社会では、情報に偏見が含まれていることは言うまでもない。たとえば、食の安全性については全く良いイメージはない。秋になると上海では、道にいい匂いを漂わせて焼き栗を売るおじさんがいる。貧しい身なりのその人から、今の日本人は栗を買うだろうか。私は抵抗など少しもなく、よく買っていた。実際においしかったし、黄色く色づいたプラタナスの木の下で食べる焼き栗は秋の風物詩でもあった。中国の食べ物が日本より安全性に欠けている部分があるのは確かだ。しかしお互いを決めつけずに知ろうとしていかないといけない。もっといいことを知っていく努力も必要なのだ。

私はマイナスではない中国を知っている。上海に渡る前私は、中国の人の言葉は少しきつく感じるかもしれない、と親に念を押されていた。しかし中国を知った今思い返してみると、そんな忠告は日本人から見た中国にすぎなかったのだと気づく。外国とはいっても小学生だった私は両親に守られていた。今の歳で住んでいれば、感じるものは全く違ったのだろう。だからこそ、私にとって、ふるさとの一つともいえる中国の良さを知ってもらうために、日中の架け橋になれるような人になりたい。

問題を解決することは大切だ。しかし、目の前のことだけでなく長い視野で捉え、相手を理解すること。そして日本人も中国人も一方の考え方だけでなく、相手をまず知って、帰属意識や文化の違いを認めること。これが互いの国の人々がこの先幸せに暮らしていくために必要不可欠なのだと考えた。

「混沌」これが中国上海を表す、私にとっての一番の言葉だ。そこにはいろいろな匂いが詰まっている。

馬場　弘基

「私にとっての中国～中国への旅～」

中国は、私にとって生きていく力、エネルギーを呼び覚ます場所です。私の生きていく力とは、自分の目で多くのものを見てやろうという好奇心であり、未知の環境に飛び込んでやろうというチャレンジ精神です。私がこの中国と出会うきっかけとなったのは、大学入学と同時に始めた中国語の学習でした。

学習を進めるうちに、語学力向上とともに自分にとって近くて遠い存在であった中国を体験してみたいと考えるようになり、大学３年次に上海へ語学留学をしました。

現地の大学では、留学生クラスで学んでいたため、深く中国人と関わる機会は多くありませんでした。そこで、夏休み期間を利用し、鉄道で中国国内を一人で旅することにしました。当時中国近現代史を学んでいたため、近現代史に関わりが深い江西省、湖南省を目指すことにして、一番安い座席の切符を購入しました。その座席が、”硬座”でした。

名前の通り固い４人掛けのシートを見て、何も知らなかった私は驚き、この席で十数時間過ごさなければならないのかと少し不安になりました。同じ座席に座ったほかの３人は全員中国人で、私は緊張しました。しかし対面の座席に十数時間座るわけですから、黙って過ごすわけにもいきません。そこで勇気をふりしぼり、つたない中国語で会話を始めました。

最初は私が日本人だとわかった時に彼らの態度が変わるのではないかと心配しましたが、それは杞憂に終わりました。彼らは私が日本人であるとわかっても、それまでとかわらずに私に接してくれました。日本文化と中国文化の違いや日本語についての話題になり、私は即興で日本語講座を開いて大変もりあがり、私たちは仲良くなりました。そして目的地である南昌に着くと、彼らは私のために安宿を探してくれました。この時、私の中のチャレンジ精神が呼び覚まされました。恐れずに未知の環境に飛び込めば、素晴らしい体験ができると知ったのです。

それから約１カ月の間、私は一人旅を続けました。さまざまな地を訪れましたが、何よりも移動途中の硬座や宿での交流が忘れられないものになりました。好奇心とチャレンジ精神から、様々な人々と出会い、交流することができました。少数民族の料理人の卵、出稼ぎで職を探している人、夏休み中の大学生。彼らと夜の露店でビールを飲みながら語り合った時間。ただ語学留学をしているだけでは触れ合うことのできない、エネルギーに満ちた中国を感じることができました。

自分にとって非常に大きな体験であった留学を終え、昨年日本に帰国しました。帰国から１年半以上たち、中国語の学習もおろそかになっていた今年の９月に、私は再び中国を訪れました。目的地は旧満州の東北部。日本と中国の歴史を学ぶようになって、実際に旧満州の地を訪れたい気持ちが強くなり、この旅を決めました。久しぶりの中国で、過去様々なことがあった地であるために心配を抱えたまま出発しました。

しかしこの心配も再び杞憂に終わりました。私は各地でドミトリーに宿泊し、そこでまた素晴らしい出会いと体験をすることができました。哈爾浜のユースホステルでの出会いです。二人の中国人と同室になり、旅行の話で盛り上がったのちに、次の日の予定の話になりました。私は 731 部隊跡を訪れる予定で、中国人に 731 部隊の話をするのは少しためらいましたが、731 部隊跡に行くことを話しました。すると彼らも訪れる予定で、一緒に行くことになりました。

「中国を知り、歴史に向き合う勇気を持った君を尊敬する」。これが、私が彼らからかけられた言葉です。731 部隊跡は歴史に関わるもので、非常にセンシティブなものなので、彼らに何を言われるのかと心配しましたが、彼らは対等に私と付き合ってくれました。一日一緒に行動し、バスで哈爾浜の観光地を巡り、夜は哈爾浜ビールを飲んで私たちは思い出に残る一日を過ごしました。そして、また中国で再会することを誓いました。

列車や長距離バスを乗り継ぎ、久しぶりに中国語の世界に飛び込んだ今回の旅も、私のエネルギーを呼び覚ますものになりました。自分の考えが中国語で表現できなかった時が一番悔しく、もっと中国語

を上達させたいという向上心と、もっといろいろな場所に行きたいという好奇心が湧き出てきました。これから、中国がどのように発展しても、私にとっての中国は生きていく力、エネルギーを呼び覚ます場所であり続けると思います。また、これからも歴史から目を背けることなく、より隣国である中国を知り、日中友好に少しでも貢献できるような人間に成長していきたいと考えています。

≪佳作≫

松坂　茉留

繋ぐ未来・中国・日本

私はこの世の中に失望しています。中国産のウナギには餌に大量の薬品や死体が含まれている、期限切れや床に落とした鶏肉を使用していた、まがい物の臭豆腐、ＰＭ２．５のような大気汚染、日本へ来た中国人が罪を犯す……キリがないほどありますね。あなたはこれらのニュースに衝撃を受けたり、失望したりしていますか？

私がもし、そう聞かれたら、「いいえ。私は違います。」と答えるでしょう。では、私は一体何に失望しているのでしょうか。それは、そのようなニュースを日本人が見たり聞いたりし、中国へ悪いイメージをもってしまうということです。

確かに、先ほどのニュースは事実かもしれません。日本国民の安全の為にも、警告する必要があります。ですが、そのようなニュースばかりで、中国人がどんなに良いことをしても、「ザ！世界仰天ニュース」で取り上げられる程度であり、中国への印象はほとんど変わりません。

中国と日本は「永遠の隣人」です。「中国と日本」と聞くと、規模が大きく、自分にはあまり関係のないように思われますが、「隣人」と聞くと、自分の周りの人、身近な人などが想像できます。本来ならば、お互いに助け合うべきなのです。しかし、今、良い関係だとは言いきれないのが現状です。人間関係で例えるならば、「〇〇さんは××だから近づかないほどがいいよ。関わらない方がいいよ」「〇〇さんって△△さんと仲悪いからちょっと……」と、自分は実際何の被害も受けていないのに、誰かのうわさに踊らされ、自分も一緒になって嫌っているのと同じようなことをしているのでしょうか。

ウナギを見るなり「これどこ産？ うわ、中国かよ！」と言ったり、物を見るなり、「MADE IN CHINA か……粗末だ……すぐ壊れそうだ」と言ったり、中国人を日本で見かけるだけで、不思議なものを見る目で見たり。昨年までの私はこれらの人達と同類でした。しかし、今は違います。高校生になり、中国語を勉強しはじめてから、少しずつ気持ちに変化が表れました。まず、中国についてのニュースが流れていても、それはごく一部だ、と中国全体としてとらえることはなくなりました。また、中国語講座を動画でやっている人が「日本人はとても親切で日本も日本人も大好きです」とおっしゃっている方がいました。これを聞いた時、やるせないような、申し訳ないような、複雑な気持ちになりました。こんなに日本を想ってくれる方が身近にもいるのに、日本人は「中国人」というだけで、「投射」してしまっているのです。

この現状をどうにかしなければ、近い将来、困難に直面しかねないと思います。今の私に出来ることは、友達の名前を中国語で何と読むかを教えたりすることです。そうすることにより、私は、友達に教

えられるように沢山勉強しますし、教えられた人は、嬉しく、中国語に興味をもってくれるようになります。一人でも多く、中国人への嫌悪感がなくなるように、日々努力を惜しまず頑張りたいと思います。

私が選んだ中国語コースは、毎年、修学旅行で中国に行っていましたが、日中関係があまりよくないことから、台湾になっています。私は中国の全部が全部、危険ではないと思うし、実際に交流をしてみて、好印象をもつこともあると思います。

過去に、私はシンガポールからの留学生を２人、受け入れました。その時から、英語や中国語、異文化に興味をもつようになりました。そこで、今度は私が影響する側になりたいと思います。いつか中国へ行き、中国に行かなければわからない良さや、日本との違いなどをたくさん学び、それらの発見や経験を日本に帰ってから、多くの日本人に伝えたいと思います。また、交流に関わってくださった方の思い出に残るようになるだけでなく、自分と交流したいことで、相手に何か変化が表れたら幸いです。

孟子の「性善説」と荀子の「性悪説」ならば、前者の「性善説」に私は賛成です。人は誰しも、欠点がありますが、必ず良いところも沢山あります。欠点ばかりを指摘せず、良いところを探せるような人になりたいと思います。その為に、普段から授業に集中し、習ったことを応用しながら、同じ中国語コースの人や先生と中国語で会話し、コミュニケーション能力を高めたいと思います。

周りの人に「中国と言えば？」と聞くと、「料理がおいしい」「工業技術がすごい」「人口が多い」などが挙げられました。人口が多いからこそ大学の競走率が高く、みんな必死だと思います。商売もねぎったり、セットで買うとお得になったりと、日本ではあまりないようなことがあると知り、カルチャーショックを受けました。それは人口が多いからこその、発展だと思います。

「MADE　IN　CHINA」から「MADE　IN　PRC」にして、売り上げを伸ばすなど、様々な可能性を私は信じています。日本は、輸出入に頼っていて、貿易国として、中国は欠かせないと思います。お互いに支え合い、日中関係も少しずつ良くなることを祈っています。

潮田　央

バトン

高校受験手前の中学２年の時、大事な時期の息子を残し、父は瀋陽の遼寧大学に日本語教員として派遣された。これは神奈川県と遼寧省の友好協定に基づき、神奈川県立の高校から国語の教員が派遣されるという制度があるためだ。日本語について勉強をしている姿はよく見ていたが、まさかそんなことになるとは。それまで絵本では『西遊記』、ゲームやマンガでは『三国志』等、中国の作品に触れたことはあったが、自分の父が行く国となるとまた違った思いを持った。これが中国とのファーストコンタクトである。

その縁で家族旅行は中国に行くようになった。赴任している父を筆頭に、家族一同、私の中学・高校期間だけで３度旅行した。1990 年代の中国は、トイレにドアが付いていなかったり、流れなかったりということはざらであった。また分煙すらしていなかったので、どこに行ってももくもく煙が立っていて、未成年にはとても辛かった。空港ではかんだ手鼻をつけられ、飛行機は遅れ、行く都市ごとに土産売りにかこまれ、正直に言えば嫌なことは多かった。書物やテレビを通して知った世界とは全く異なる世界、一高校生には少々刺激が強すぎた。自分で体験し、文字通りカルチャーショックを受けた。

しかし、嫌な思い以外にも色々なことを体験した。道に迷っていたら助けてくれた人がいた。珍しいものをたくさん食べた。日本にはないような壮大な景色を見た。また、食事に招待してくれる人たちもいたし、逆に中には全く我々に興味を持たない人もいた。一見日本に似ているが、全く違った世界であった。イメージは良いところも悪いところも幅広い。この奥行きに魅了された。そうして、気がつくと大学は中国文学科に進学することに決めていた。

興味を持った中国について学ぶのだから、大学では毎日楽しかった。古典文学に現代文学、中国語、文化や歴史。高校で学んだ漢詩を中国語で読むことは新鮮だったので有名な詩をいくつか暗誦できるようになった。中国からの留学生と話すこともあったし、中国に旅行に行くこともあった。人との出会いはどれも本当に楽しかった。古典文学を学ぶ研究会にも所属し、卒業論文には唐詩を選んだ。将来は教員になり、自分が学んだ中国文化の魅力を伝えたいとも思ったが、当時は公立高校の教員採用がゼロ、もしくは片手で数えるぐらいしかいない時期であったため、試験を受ける前から諦めてしまい、進学も考えたが、母が病気であり一般企業に勤めることにした。就職難ということもあり、中国とはあまり関連のない企業であった。

１年たち２年たち、３年間、毎日の仕事に追いまくられ、日常につぶされていた。営業職と言うこともあり、学んできたことは何も使えなかった。中国語を使う機会もなく、中国について話すことと言えば経済のこと。朝早くから夜遅くまで仕事をしていた。行き帰りの電車で中国についての本を読み、たまの休日に中華街や博物館の中国展に行くことが心のやすらぎであった。

ある時、取引先で杜甫の掛け軸を見た。そこには「旅夜書懐」の尾聯が書いてあった。暗誦できる句である。「飄飄として何の似る処ぞ、天地一沙鷗」。中国語の響きが頭に浮かび、内容が、詩の内容通り、月のように湧き上がってきた。毎日さまようかのように様々な取引先のところに行き、数字に負われ、心情を吐露することもできない。どこを漂っているのか。一瞬考えてしまった。実体験を伴って詩の内容が頭に入ってくるというのは初めてのことだった。取引先の方に聞くと、何が書いてあるか知らないという。しかし内容を説明すると「意味がわかると感動するねぇ」と言ってくれた。これだ、と思った。大学院で研究を続けている先輩に呼ばれ、もう一回勉強したらと勧められたのはこの少し後だった。秋に進学を決め、冬に退職して受験し、翌春から大学院に進んだ。

一度は明確な目標もないまま就職してしまったが、今回はもう後がない。高校の教員となり自分が学んできた中国の文学や歴史、文化そして中国語を教えたい。そう思い準備をした。辛いときに支えとなってくれた中国文学や文化、それらを今度は発信する立場になりたい。きっと、心の支えとして必要な人たちがいるのだから。私と同じように。

漢字によって書かれてきた中国の作品は、媒体は変わっても作られた時そのままの字で読める。世界的に見ても珍しいだろう。その間どれほどの人が読み、磨いてきたのか。そして、幾人を感動させてきたのか。昨日今日作られたのではない、中国の古典のすばらしさがそこにあるのではないだろうか。そして、現代に生きる中国の人たちも脈々とこの伝統を受け継いでいる。

今から６年前。ついに高校の国語の教員となった。教えるのは当然漢文だけではない。古文も現代文も教えている。働きながら、日中学院で中国語を学び直し、また、吉林大学の高等学校中国語担当教員研修にも参加した。今年転勤し、総合高校で中国語の授業にも携わっている。この間、日中間の「島」をめぐる問題で日中関係は悪化していった。しかし両国の長い歴史を考えれば、こんな時期もあるのだ。くよくよとばかりはしてられない。自分にできることは、今の立場で自分が感じたように中国の魅力を

伝えることだけである。来年からは、総合高校特有の「国際理解」という科目も担当する予定だ。中国のみならず世界と日本との関わりを生徒と一緒に勉強していきたい。

将来の夢が二つある。一つは日本で中国語を日本人に教えること。もう一つは、かつて父がしたように、中国で日本語を日本人に教えるということである。そのためにはまだまだ勉強の必要がある。また、自分が感動した中国のことを次の世代の人たちに伝える義務があると考えている。一人の人間として中国と向かい合ってきたつもりだったが、気づけば色んな人からバトンを受け取ってきた。まだまだゴールではない。受け取ったバトンは次の人に渡すものである。

中山　一貴

「縁」と私と人間関係

「縁があったらまた会おう。」

日本人もよく使う「決まり文句」だが、中国人にそう言われると何故か本当にまた会えそうな気がするし、実際にまた会えてしまうことが多いから不思議である。例えば私が中国西北の地、敦煌を旅していたとき、浙江出身の中国人と意気投合し彼と 2 週間に渡り新疆ウイグル自治区を巡ることとなった。旅が終わり彼と別れを告げ、私は「一期一会とは正にこのことだな」と思っていた。ところが数カ月後、彼の仕事の配属が私の留学先であった北京に決まり、すんなりと再会を果たしてしまったのだ。「さようなら」の中国語は“再見”。「再び見る＝会う」という意味だ。私の目に映る中国。それは日本とはどこか違う「縁」を大切にする国である。

中国の縁にまつわる他のエピソードを紹介する前に簡単に自己紹介をしたい。私は高校生活が終るまで中国との関わりがほとんどなく、むしろ日本に対する抗議デモや毒入り冷凍餃子事件のせいか、中国に対する印象は決して良いものではなかった。ところが大学 1 年生から中国語を学び始め、初めて中国の友人ができ、中国に行って中国に魅せられ、気づけば学生主体の日中交流活動を 4 年間続けるまでになっていた。「中国のどこが好きなのか？」と尋ねられる度に何から答えればよいか考えてしまうが、数有る理由の中でも今回は私が中国の「縁」にどのようにして魅せられてきたかについて振り返りたい。

「縁」という概念は日本にも中国にも存在するが、日本人と中国人では「縁」に対する捉え方に違いがあるのではないか。そう考えるに至ったきっかけは両国の「お会計文化」の違いに驚いたことだった。私が 2012 年春に留学で北京を訪れたばかりの頃、学生どうしであるにも関わらず中国の友人に何度もご馳走されてしまい、申し訳ない気持ちになった。始めは外国人が中国に来たばかりだからかもしれないと考えていたが、飲食店でふと周りのテーブルを見渡してみると、中国人どうしの間でも「奢り」が頻繁に行われていたのだ。会計になると皆がいそいそと財布を取り出すという日本の居酒屋などでよく見られる風景は、北京に限らず西安、成都など中国の多くの地域でもあまり見かけることはなかった。

不思議に思った私は何人かの中国の友人に次のように尋ねたことがある。「どうして学生どうしなのにご馳走するのか。日本人の中には自分もお金を出さないと気まずいと感じる人も多い」。それに対して何人もの中国の友人が「ご馳走は友情の印だ。割り勘をするとその場で縁が途切れてしまうように思える」と答えた。にわかに信じ難かったが、実際に中国では「この前は A がカラオケ代を出してくれたから、今回は俺が食事代を持とう」、こうしたやり取りが頻繁に行われていた。「友情の印」の表現が

一度限りではなく、その主体を変えながら何度も繰り返される。私は中国人がいかに「縁」を大切にしているかを知り、これまでの自身の人間関係について反省せずにはいられなかった。

中国の「縁」の魅力はこれだけではない。『論語』に「朋あり遠方より来る、また楽しからずや」という一節があるが、ここで私が中国各地を旅した際に経験した出来事を紹介したい。それは 2013 年の冬、1 年間の留学生活も終わりに差し掛かった頃に私が上海の友人のもとを尋ねたときのことである。彼は食事代はおろか、タクシー代や観光地のチケット代まで全て私の代わりに出そうとしてくれたのだ。筆者は自身の申し訳なさに嫌気がさし、その友人に単刀直入にこう伝えた。「おもてなしの気持ちは本当に嬉しいし、中国では地元にやって来た友人の食事代を持つなどのことが比較的一般的であることも分かっているつもりだ。しかしチケット代まで払ってもらうわけにはいかない」。すると彼は肩を落としながらこう答えた。「日本人が遠慮しがちなのは分かっているつもりだ。しかし『もてなしたい』という気持ちも分かって欲しい」

一見すると「縁」とは何ら関係のない出来事のようだが、私はその後、彼を悲しませてしまった原因を解明するべく「中国版 Twitter」と称される“微博”上で簡単なアンケート行った。内容は単純に「なぜ中国人は自身の地元を訪れる友人を徹底的にもてなすのか」というものだ。「次に自分が相手の地元を訪れた際にしっかりもてなしてもらうため」という回答には面を喰らった。しかし私が回答者に対して続けて「日本人は奢られ過ぎると申し訳なく思ってしまうこともあるがどう思うか」と尋ねたところ、「その場でお金を出されてしまうと、その場限りでやり取りが完結してしまい、次がなくなってしまうように思える」と、どこかで聞いたような話である。私は上海で友人に奢られ続け、申し訳なさのあまりに相手の厚意を断ろうとしたが、それは見方によってはその「縁」を一度限りのものにしてしまいかねない行為だったのかもしれない。

中国の「縁」は、表面的な人間関係に甘んじようとする私にいつも喝を入れてくれている。「縁があったらまた会おう」は、もはやただの常套句ではない。

小西　姫加

縁～広がる出会いの中で～

３年前、日中国交正常化 40 周年を迎えた日本と中国だが、日中間の「島」をめぐる問題により関係が冷え込んだ影響で、日中友好記念活動が次々と中止されたことはまだ記憶に新しい。3 年経った現在も不安定な関係は続いており、今後の両国関係の在り方が注目されている。

私と中国の出会い。高校卒業後、地元の大学へ入学し、中国語を勉強し始めたことがきっかけだ。日本語にはない声調や発音が難しく、選択したことを後悔していた。そんな時、中国の山東省から来たという交換留学生と出会った。中国語を勉強し始めたことが縁で出会った初めてできた中国人の友人。最初の頃はあいさつを交わす程度の関係だったが、少しずつ仲を深めていった。ただ一緒に遊びに出かけたりするだけではなく、授業の合間には相互に言語、伝統行事や文化などを教え合った。

相互学習を続けていくうちに、今まで楽しくなかった勉強の楽しさを知り、中国語や中国文化の魅力に惹きつけられるようになった。そんな折、昨年友好協定 30 周年を迎えた故郷山口県の国際友好姉妹都市、中国山東省から留学の機会頂いた。

留学の機会を頂き非常に光栄だったものの、決意に至るまでは時間を要した。留学の件を両親や友人に相談すると、皆口を揃えて「大丈夫なの？」「なんで中国なの？危険じゃないの？違う国にしなよ」と言うのだ。中国や中国人への好感度、理解度の低さを実感した瞬間だった。

新聞やメディアで毎日のように日中問題が取り上げられ、実際中国人と交流する機会がないため、しかたないことなのかもしれない。しかし、日中関係の改善が急がれている今を考えるとこのままではいけない。留学での実体験を通して学び得たものを周囲に伝え、中国に対する印象を変えていきたい。中国語や文化を学ぶと同時に本当の中国を、五感を使って学ぶいい機会だと思い、周囲の反対を押し切り、思い切って飛び出すことにした。

昨年９月、留学生として初めて中国へ渡り、期待と不安でいっぱいの留学生活が始まった。人の多さが日本と比べものにならず、溢れる熱気に圧倒された。語学面で苦労することはあったものの、市民の熱烈な歓迎を受け、生活にはすぐ馴染んでいくことができた。私の留学先は、山東省の省庁所在地である済南市という所だった。済南市は、天然の泉が街の至る所で見かけられ風情の良い別名「泉の都」と呼ばれる都市である。また、市の北方には黄河が流れ、南方には、世界遺産に登録されている泰山がある。

中国に渡り１カ月たった頃、一度は登って見たいと思っていた泰山に、大学で知り合った中国人の友人たちに誘われ登った。

朝方山頂に辿りつき朝日を見るため、夜中に 1500 メートル以上もある山を登りはじめた。想像以上に大変な道のりだった。ひたすら続く階段、急な勾配、頂上が見えたと思ったらまだ中間付近。足が疲れ切り階段が上れなくなり、一人で途中休憩した。夜中冷え込んでいるうえに真っ暗で先も見えない、もうここでやめて降りてしまいたいと思った。しかし、一人でしゃがみこんでいると、友人たちだけではなく一緒に登っていた見ず知らずの登山者からも声をかけられ背中を押された。それから何度か休憩し、その都度お互いに励まし合いながら、５時間かけてやっとの思いで頂上にたどりついた。

山頂に着くと、子供から老人まで多数の人があちらこちらに座っていた。私たちもその場に腰を下ろしひと休みした。時間を忘れて夢中になって話しているとだんだんと空が明るくなってきた。じわじわと昇る眩しい太陽を見て感動した。同時に、もし登山中、支いあえる存在がいなかったら……途中で諦めて下山し、こんな景色を一緒にみることはなかっただろう。一緒に支え合いながら山を登ったからこそ見ることのできた景色だと感じた。一緒に山に登って朝日を見る。何でもない瞬間かもしれないが中国に来て日の浅い私にとっては、非常に心温まるひと時だった。

登山で始まった私の中国留学。１年間中国を肌で感じ、文化を勉強する中で気付いたことは、日本と中国は、我々がこの世に生まれる何千年も前から相互に影響しあい、成長してきたということ。また、広がる出会いの中で、人間関係と国際関係の付き合い方の違いを考えさせられた。日常生活でお互いが日中関係を意識しなければ、トラブルは生じないだろう。というのも、日本人中国人という前に１人の人として関係を築くからだ。実際私も、留学中特に大きなトラブルに巻き込まれることはなかった。留学生として生活する分には全く問題ないが、国や社会を動かし、日中関係の改善、国際関係の在り方を視野に入れると、どうだろうか。個人的な交流はもちろんだが、それ以上に必要なことがあると感じた。

中国語を勉強し始めたことが縁で友人になった多くの人々。私と彼らの縁は、日本と中国の縁でもある。その縁を存続させていくために、民間レベルでの交流を続け、相互に理解を深めあうことは非常に重要である。交流といっても表面上の関係を続けることが目的ではない。交流する中で、最も重要なこ

とは、山登りと同様、嫌な面から目をそらさず一緒に苦しいことに向き合うことだ。過去に目を向け現実を認識し、将来の在り方を考える。苦の部分を共に乗り越えていくことで、本当の意味で互いを信頼し高め合える存在になれるのではないだろうか。留学から帰ってきた今、机上の勉強だけでなく何度も現地に通い理解を深めることに尽力したい。そして近い将来、山口県と山東省、日本と中国の交流促進を担う一員として人と人、国と国を繋ぐ架け橋になり、日本と中国の縁を今後も存続させたいと強く願っている。

あの時、山に登って山頂で見た朝日のように、日本と中国も相互の努力を通して明るい未来を開いていけると信じている。

岸　朱夏

二胡を通して見えた中国

すべては馬の鳴き声から、始まった。そう書くとまるで小説の一節のようだが、思いかえしてみると私と中国の関係はそこから始まったのだと思う。私は今までに、中国に行ったことがない。高校では選択科目として中国語を習っているものの、少ししか喋れない。ただ、中国の音楽はよく知っている。二胡との出会いが私に中国を教えてくれたのだ。

初めて二胡に出会ったのは、５歳の時。母が習い始めた、二胡の発表会でのことだった。ぼんやりと音を聞き流していた私は、軽快な音楽を聞いて驚いた。今まで聞いたことのないその曲は、馬の鳴き声で締め括られた。楽器で動物の鳴き声が弾けるなんて、と一目惚れならぬ一耳惚れをしたかのように、呆然となったのを覚えている。母の先生が弾いた賽馬という曲を弾いてみたいと思ったのが、二胡を始めたきっかけだった。

習い始めてみると、思ったよりも難しく、弓で音を鳴らすことも、ままならなかった程だ。左手の音階では手の形も難しく、右手と同時に動かすのは、さらに大変だった。しかし、大変だからこそ曲がスラスラ弾けた時の喜びは大きかった。また、中国の女性の先生に習っていたのだが、先生は中国のことも沢山教えてくれた。中秋の明月のイベントで食べた月餅や先生が作ってくれた水餃子も、忘れられない楽しい思い出だ。二胡を通して、幼い私にとっては隣の国という認識だった中国が、次第に特別な国になっていった感覚はよく覚えている。

実を言うと、私は二胡のことがずっと大好きだったという訳ではない。二胡を始めて５年くらいした頃、練習が大変で面倒に感じられたのだ。また、二胡をやっている同世代もおらず、一人ではなく誰か近い年の子と弾きたいと思った。まわりの子はピアノなどを習っていて、今どきの曲などを弾いている子が多かった。一方、私が弾いていたのは古い曲が多く、今どきの曲とは違った、下手したら曲名も読めないような曲だった。それでも、ここまで続けてこられたのは二胡を通して出会った人々や、心の底では二胡がやっぱり好きだという思いがあったからだと思う。11 年の間、自分なりにゆっくりとだが、続けていて良かったと思う。続ける時間が長くなるにつれて、音色も少しずつ変わってきた。今はこれからどんな自分の音が出せるようになるか楽しみだと思えるようになった。弾き始めるきっかけとなった馬の鳴き声や賽馬も、一応弾けるようになった。受験の時は二胡がリラックスやストレスの発散につながった。これからも続けていくのは楽ではないと思うが、続けていきたい。そして、いつか自分なりの音を表現できるようになりたいと思う。　最近、日本でも中国でも互いの国をあまり良く思わない人

が増えていると聞く。日本人同士でも、気が合わない人がいるのは当たり前だ。国が変われば、なおさらそうだと思う。しかし、国自体が嫌いというのは違うのではないだろうか。さらに心配なのは、互いの国を良く思わない人が多いと、また次の世代にもその考えが伝わってしまう恐れがあるということだ。このままでは、ずっと嫌い合ってしまうこともあるかもしれない。私が知っている中国は、二胡という楽器を通して見えたものだ。だが、二胡を通して中国を見たことで以前よりぐっと中国が身近に感じられた。だから、お互いの国があまり好きでない人こそ、歴史や文化、その国の人によく触れて様々な視点でその国を見てほしいと思う。一人の人間に良いところと悪いところが混在しているように、一つの国にも良いところと悪いところはあるだろう。ただ、悪いところが見つかった時に、それを悪いと決めつけるのではなく、認めて受け入れることが友好の第一歩となるのだと思う。

お互いの国を知って好きになる人が増えれば、次の世代にもそういった考えは伝わると思う。そうすれば、ずっと二つの国が仲良く、尊重し、助け合えるようになるのではないだろうか。私は二胡によって、多くのことを学んだ。時間はかかると思うが、今度は私が二胡を通して様々なことを伝えたり、お互いの国を好きになったりできるような手助けをしたいと思う。私自身も二胡を通してだけでなく、中国をもっとよく知るためにも、様々なことを学んでいきたい。

城塚　真衣

「運命の出会い」

小学 4 年生のころ、私の住む田舎の学校に、一人の中国人が転入してきました。彼女はとても明るく活発で私と同じくアニメが大好きだったので、初対面から意気投合し、すぐに仲良くなりました。しかししばらくたつと、彼女の話す日本語が時々おかしかったのか、みんなに笑われ、いつの間にかいじめられるようになっていました。そのとき私は許せない気持ちでしたが、自分がいじめの標的になるのが怖くて結局何もできないまま、彼女は近くの学校に転校してしまい、そこでもうまくいかず、最終的に帰国してしまったと母親から聞きました。昔のことなので鮮明に覚えている訳ではありませんが、私はとてもショックだったのを覚えています。

それから何もなく日々を過ごし、大学受験の年になっていました。私はいろいろな大学の情報をインターネットで見ていて、ふと今在籍している学部の情報を目にしました。4 年間のプログラムの中に、中国留学が 1 年ある！私は昔から外国語に興味があり専門的に勉強したいと思っていたので、この募集を見た瞬間、中国語を学びたい！と自然に思うようになっていました。そしてなんとこの思いが通じて無事に合格し、留学のチャンスを手にすることができました。

私は北京大学という名門大学に 1 年間留学することに決まりました。留学に行く前は、言語は学んだものの中国人とどのように接したらいいのか、中国人に攻撃されないかとばかり考えていました。なぜなら、私が留学に行ったちょうどその時期、2012 年は「島」をめぐる問題の真最中だったからです。さらに中国に着いて 10 日ほどたった 9 月 18 日には、満州事変の発端となった柳条湖事件の日だということもあり、日本への抗議活動が起こるのではないかと終始不安でした。しかし、そんな私の不安も 1 カ月すればもう消え去っていました。少なくとも私が出会った中国人たちはみんな、日本から来て中国と向き合おうとしてくれている日本人の若者の一人だと言って歓迎してくれました。私も日本ではこうだからという概念を取り払って、中国人と接したいと日頃から考えていたので、すぐに彼らと打ち解けら

れました。学生同士の交流では、日本語や中国語を教え合ったり、北京の歴史的建造物を見に連れていってくれたり、旧正月には実家にまで案内してくれました。さらに、私は学生以外での交流も大切にしてきました。旅行の道中では、隣に座った人と日本や中国の素晴らしいところについて話をしたり、タクシーに乗れば運転手とたわいもない会話を楽しんだりしていました。最終的には休日を利用しては中国各地を歩き回り、50 人の中国人に日本の文化を知ってもらおうと企画し、大都市だけでなく、郊外や農村に行ってインタビューをしたり、折り紙を教えてあげたりとさまざまな人との交流を大切にしてきました。私は交流を通して、中国の方たちの温かい心に触れ、一期一会を大切にし、人との絆を大切にする文化に非常に感動しました。

そんな日々の中でふと、小学生の頃に出会った中国人の友人のことについて思い出しました。あの子はこの広い中国のどこにいるのだろう、覚えているのかわからないが会ってみたいと考えていました。思い立ったらすぐに行動しなければ気が済まない性格なので、早速小学生の時の先生や友人に連絡をして、行方を探しだしました。しかし、昔のことなのでなかなか有力な手がかりが見つからず、結局そのまま帰国してしまいました。日本に帰ってきてからも探し続け、ついに当時その友人の母親の中国人の友人の方に聞いて、今南京の近くに住んでいることがわかりました。幼かったけれども、中国に興味を持つきっかけを与えてくれた友人に感謝の一言と、さらにあの時はごめんねと言いたい。もしかしたら私は中国語を学び、中国について学んでいる事は一つの運命だったのかもしれません。だから私はこれからも彼女を探すことをあきらめず、今後もっと多くの人との交流を通して、日中を繋いでいきたい。

三木　謙将

「千里はなれても」

「小日本！」そう叫びながら日本製品を打ち壊す中国人。2012 年、日本では中国の日本への抗議デモの様子がテレビで盛んに流されていました。私の家族や友人は、中国人の暴力的で感情的な振る舞いに憤慨し、呆れ果てているようでした。私も中国人の暴挙には確かにショックを受けましたが、一方で彼らに対して非常に興味を持ちました。日本と中国は隣国でありながら、国民性がまるで違うのはなぜか。中国人はなぜ日本に対してあれほど感情的になるのか。国民に一党独裁の不満は無いのだろうか。デモの様子を見ながら、そんな疑問が頭に浮かんできました。そして、中国人をもっと知りたくなりました。

そこで、中国を理解するには現地に飛んで中国人と関わるのが一番だと思い、すぐさま大学のプログラムで中国の上海に留学しました。私の上海留学の目標はただ１つ。それは「中国人の友を作ること」。私は昨今の日中の関係悪化は、両国民の互いの情報不足が原因の１つだと思っています。だから日本で『中国脅威論』が論じられ、中国で日本の軍国主義が台頭しているなどと騒がれるのでしょう。ネットでは特にこうした極端な意見が目立っています。私は半年間の留学生活で、中国人と生身で接し、相互に理解し合える関係になることを望んでいました。

私は中国では野球ばかりしていました。留学先の復旦大学には野球部があったので、そこに所属し、毎日中国人たちと白球を追いかけていました。復旦大学野球部には 20 人ほどの中国人がいます。全員大学から野球を始めた初心者で、野球経験者の私から見れば動作はかなりぎこちないのですが、熱心に野球に取り組みます。私は彼らの野球のコーチも務めたのですが、私の助言を聴く彼らの目は真剣そのも

の。中国人たちはどんどん上手くなっていきました。こうして、私は野球を通じて中国人と仲良くなりました。趣味のことから政治のことまで、様々な話ができるようになりました。

留学の「中国人の友を作る」という目標は案外簡単に達成したように思いましたが、そう上手くはいきませんでした。留学が終わり、私が日本に帰国した後も中国人とは何度か連絡を取りました。しかし、時間が経つにつれて連絡は途切れ始め、次第に彼らの存在は薄れていき、1年を過ぎるとメールのやりとりは一切無くなりました。異国の人々と、たった半年間の付き合いで親密な関係を築くなど、やはり簡単なことではないのです。中国留学から2年が経ち、私はそう思うようになっていました。

今年9月、2年ぶりに上海を訪れました。目的は留学時代ルームメイトだったトルコ人に会うこと。野球部の中国人たちに会おうとは思いませんでした。疎遠になっていたからです。ところが、1人で街をぶらぶらと歩いていたときのこと。突然中国人に声をかけられました。びっくりして振り返ると、一緒に野球をした復旦大学の男でした。あまりに突然の出来事に驚きを隠せませんでしたが、自分のことを覚えていてくれたのかと思うと、私は嬉しくてたまりませんでした。また多くの人々が行き交う上海で偶然再会するなど奇跡に近く、私はとても感動していました。私を呼び止めた彼もかなり嬉しそうです。私の肩をバンバン叩きながら、興奮気味に中国語で何か連呼しています。しかし早口で全く聞き取れません……。彼は急いでいました。「用事があるから行かなきゃいけない。今夜また連絡するよ！」そう言って、私に連絡先を伝えて、名残惜しそうに去っていきました。

その晩の彼とのメールでのやりとり。私が「きみが連呼していた中国語、早くて全く聞き取れなかった」と言うと、彼からすぐに返信が来ました。漢字が７文字、「有縁千里来相会」。「縁があれば千里離れていても会える」という意味の中国のことわざです。私は思わずその７文字をじっと見つめてしまいました。彼が繰り返し言っていたのは成句だったのです。「有縁千里来相会、無縁対面不相識」「縁があれば千里離れていても会えるし、縁が無ければ目の前にいても知り合うことはない」とも言うようです。なんて素敵な言葉でしょうか。人との出会いがどれほど素晴らしいものかわかります。そこで私はようやく気付きました。中国の留学で得たつながりを切っていたのは、月日ではなく、私自身でした。もし、街で私の方が彼を見かけていたら、おそらく声はかけなかったでしょう。人との出会いがどれほど貴重か理解していなかったからです。しかし彼のおかげでようやくわかりました。縁は大切にすべきなのだ、と。

両国の領土問題や歴史認識問題は、まだ解決の糸口を見つけられずにいます。今年の両国民の世論調査の結果を見ると、日本人の93%が中国に良くない印象を持っていると回答し、過去最悪だった前年より対中感情が悪化。一方、日本に良くない印象を持つ中国人は86.8%で、最悪だった前年より改善したものの、過去２番目に高くなっています。両国の溝はなお深く、日本と中国の国民間の心の距離は今や千里以上の隔たりがあるのかもしれません。そんな関係が改善されるのは果たしていつになるのでしょうか。日本と中国の関係は古来非常に密接でした。日本にとって、中国は文化の祖国でもあります。隣国同士の私たちには、切っても切れない縁があります。その縁がどれほど貴重で、尊いものなのかを互いに理解し合える日が一刻も早く訪れてほしい。私はそう願っています。

門間　里奈

出会い

「私に、中国人の友だちが出来るんだ」と私の胸に湧きあがった高揚感を、今でもはっきりと覚えています。

それは、私が県内で開催される全日本中国語スピーチコンテストにエントリーした事がきっかけとなりました。数日間に渡り、私は高校の中国人の担当の先生にスピーチの練習を指導して頂きました。課題となっているスピーチは、初級者向きのあまり長くはない文章でしたが、中国語独特の抑揚の使い方や、ピンインを正確に表現しなければ成らないので、とても難しい内容でした。私は何とか、全文を覚え、難関の会話文や細かい表現法を身に付けていました。

ある日の放課後の事です。先生は、私に一人の中国人の女子生徒を紹介して下さいました。これまで何にも聞いていなかった私は、想定外の出来事に驚き、戸惑っていた気持ちを記憶しています。そもそも私は、先生以外の中国人と話をした事がなく、初めて経験となりました。しかし、私の気持ちの動揺は、彼女と対面した時に払拭し、素晴しい出会いと喜びに変わっていました。

あの時、私の教室を訪ねて来た彼女は私と目を合わせるなり、ニコリと微笑を浮かべ、「初めまして！」と、流暢な日本語で挨拶をされ、驚いてしまいました。私は、中国語で「ニイハオ」と挨拶を考えていたので、思わず力が抜け笑顔で「よろしくお願いします」と、頭を下げ、中国語で自分の名前を言いました。

その後、先生が彼女に、私の為に中国語のスピーチの話し方を教えてほしいと、中国語で説明して下さいました。その他にも、私の解らない言葉でしたが、「仲良くしてね」という意味の様な会話だったと思います。彼女は、笑顔で対応していました。

出会った日は、お互いに忙しかったので、携帯電話のアドレスを交換して別れました。

私は、彼女が教室を跡にした後も、興奮が冷めやらぬ状態で、携帯電話の彼女のアドレスを眺め、「いつ、連絡を取ろうか」と、胸を踊らせていました。

早速、その日の夜に携帯電話のメールで、連絡を取り合いました。彼女には、申し訳けなかったのですが、私のメールは日本語の設定だけなので、迷惑を掛けているのではないかと心配していました。

お互いの自己紹介で、彼女は４年間、日本語を勉強しているとの事でした。そして、先月に日本に来たばかりで、私が初めての日本人の友だちだと話してくれました。私達は、その時から、ニックネームで呼び合う仲良しとなりました。

この日を境に、私達はいつも日本語や中国語を使って、スピーチの練習やコミュニケーションを取ってきています。

時々、解らない言葉があった時は、その場で聞き直して、曖昧な返答をしない様にしています。それは、言葉に秘められた思いの意味があるからです。必ず、お互いに伝わったから、会話を進める様にしています。現在でもそれは変わりません。きっと、解らない言葉を伝わった様に振る舞えば、お互いに気まずい関係になるのが解るからです。

これは、広い視野の話になりますが、日中の交渉にも言える事と思えます。言葉には、国々の取らえ方が違う事例が、多々あるのでお互いに補足説明を付けるなどの心違いが必要だと、私も経験してよく解りました。

時折、報道メディアで騒がれている情報を今になって、よく考えると日本側の一方的な報道もあると気付きました。きっと中国側の目線を深く取材すべきではないかと思えてきています。こういった事が、早く改善されてお互いを認め合える様な関係を築いて行ける様にメディアが変わってほしいと願っています。

これまで半年間ではありますが、私は高校で中国語を学び、自分の視野や友達とのつき合い方が大きく変化しました。私にチャンスを下さった先生や、心良く友だちになってくれた彼女に、とても感謝しています。これからも沢山の中国語を学び、「友好の絆」を深めて行きたいと考えています。

入山　宥昌

~日中間で彷徨いながらも明るい将来を夢見たい~

今から 30 数年前に、父は多くの期待を背負って日本に留学してきた。ぼくはこの中国人の父と日本人の母の間に生まれたハーフである。今年から中国語を勉強しはじめているが、まだほとんど話せない。日本生まれで地元保育園育ち、小・中・高も全て日本の学校に通っていたぼくが、小学生の頃によく父に連れられて中国大陸を旅行していたが、各地で聞いた違った中国語の発音はあまりにも多かったので、覚えることができなかった。

中学校から部活に参加するようになり、試合の遠征で中国人の友達もできたので、中国のことに対する関心も少し出てきた。しかし、その頃からテレビでは日中関係の悪いニュースがよく流されるようになり、印象に残っている「島」をめぐる争いのシーンは大変ショッキングなものであった。学校でもこれが話題となって、「日本のものだとか、どちらのものでもあるとか」といろいろな意見が飛び交っていた。ぼくは真ん中の立場であるので周りの過激な発言にいろいろと困惑していた。「なぜこのような争いが起き、このように人々は振り回されるのだろうか」とその時は思った。

日本のマスコミはあの頃、毎日のように中国での日本への抗議デモの映像を繰り返し流していた。日本の品物を置いている商店を叩き壊し、日の丸を燃やしている中国人。ぼくの周りの日本人のイメージが一気に悪化してしまった。しかし、ぼくは信じたくなかった。「本当に中国のいろいろなところでこのようなデモが起きているのだろうか」と疑問に思った。ぼくの実家の隣に中国総領事館があり、週末には黒塗りの街宣車がよく轟音を立てて周辺を徘徊するが、これは日本のすべてではないと知っているからだ。

そこで、父に薦められて中国に実際に自分の目で確かめに行った。上海空港に着いたときは少し不安もあったが、市内に近づくにつれそれが無用であることと悟った。日本と変わらない平和で穏やかな、学生や大人たちが学校や仕事場から自宅へと向かう光景が目の前にあった。

翌日、人の賑わう繁華街へ行ってみた。日本人観光客と見るやいなや、偽物ブランドを売ろうとしてくる売り子の人が、「これ安いよ、本物だよ、買って、買って」と上手ではないが、一生懸命に日本語を使っていた。商売のためとはいえ、彼や彼女たちの日本語を聞いてちょっと嬉しくなったのを今でも覚えている。

上海の街にはとても多くの高層ビルが建ち並んでいた。自分が知っている東京よりも多いのではないかと思った。また、街のレストランで食べた日本風のラーメンやたこ焼き、どれも美味しくおまけに安かった。あまり違和感もなく、親しみのもてる中国であった。もちろん、中華料理もとても美味しい。ぼくのお気に入りは豫園のカニみそ入り小籠包である。しかし、油の少ない日本料理を食べなれたせいで、油の多い中華料理を食べすぎて翌朝お腹を壊してしまった。これはいい経験であり、後にいい思い出にもなった。

この旅で、中国の人は日本のニュース報道で言っているほど日本に対し悪いイメージを持っていないことに気づいた。持っている人がいたとしてもほんの一部だと分かった。情報はたとえ量が少なくても伝え方によっては人の心をいとも簡単に操ることができるのだと痛感させられた。情報を鵜呑みせず、常に批判的な視点を持って自分の力で調べたうえで判断することの大切さがこの旅行を通じて学んだと思い、高校生なりに喜んでいた。

いま、ぼくが通っている大学は日本の中でも特別な国際的な環境をもつ学校である。学生の半数は世界各国から集まってきた国際学生である。中国からの学生も多い。ぼくは知り合いの中国人学生に「なんで日本の大学に入学しようと思ったの？」と質問したことがある。彼たちから返ってきた答えに、「日本の食べ物や、日本のアニメ、日本の文化が好き」といったものがある。ぼくはその時改めて「文化」の偉大さやすごさを知り、同時に文化を大切にしていかないといけないと思った。政治とか経済の関係は現実的な利益に絡む話が多いが、文化はもっと深いところで心と心の交流を促し、世界各国の人々をつなげることができるからだ。実際にぼくたちも学内で日々このような文化の国際交流を実践しているのである。

日中両国は引っ越しできない隣国であり、ぼくもこの二つの国の間に生まれ、これからも活きていく覚悟である。国同士の関係に翻弄されて戸惑うことも多いが、中国旅行の経験や国際学生との交流を通じて、ぼくは明るい将来に希望を持ち続けている。日中両国は近隣であるが故にお互いの悪い点も目につきやすいが、逆に近いから交流しやすい利点もあり、そこからお互いの良い点を見出す努力が不可欠だと思う。お互いに相手を認め合うことから出発し、己の短所を見つければ努力することにつながり、相手の長所を認めれば学ぶ方向に向くのであろう。それは簡単ではないと分かっているが、将来、ぼくも中国と日本をつなぐような仕事に就き、相互理解促進の橋渡し役を果たしたいと願っている。

中島　大地

私が日中交流に関わる理由

私は、いま「freebird」という学生団体に所属して、日中学生の交流活動に関わっています。その学生団体では、月に一回、中国語教室や中国料理体験イベント、川越・横浜などの町を巡るイベントなどを開催して日中学生の交流を行っています。また２０１４年夏休みには、上海で１１日間の日中学生交流合宿「ＣｈｉｎａＴｒｉｐ」を開催しました。その際には日本の関東、関西、中国の北京、上海から総勢４０名の学生が集まり、交流しました。

今回は、私がその活動に関わる理由を記します。

もともと私は、王維の漢詩が好きでした。しかし、中国に対してそこまで関心を持っていませんでした。理解もしていませんでした。しかし、大学１年生の夏休み、天津に１カ月間留学した時、中国に対

して興味を持ち始めました。そして、莫言、余華などの現代文学や、周傑倫、五月天などの流行音楽や、張芸謀、賈樟柯などの映画を手に取るようになりました。その後、偶然、友人に誘われて、日中交流に関わり始めました。

交流の中では、本当にたくさんのことを学びました。

まず強く感じたのは、中国から来た人たちの優しさです。交流の中で、偶然早稲田大学に通う中国人留学生と知り合いました。そして、雑司ヶ谷にある彼の家で手作りの中国料理をいただきました。その時、彼と、流行している中国音楽のことから、アメリカ映画の面白さ、これからの彼の人生計画、中国の将来まで語り合いました。彼は、私のために言葉を尽くして様々なことを説明してくれました。その時、私は優しさを感じて、同時に、私自身の中国に対する理解の浅さを理解しました。その後、たまたまバイトで中国人の社会人と知り合い、中国語を教わり始めました。そして、２０１３年１２月３１日、暇を持て余していたという彼に火鍋を御馳走になり、カラオケで中国語の歌を歌いながら年を越しました。その時も、優しさを強く感じました。

その後、私は出来る限り、中国から来た人たちの輪の中に溶け込み、その感覚を理解しようと努力しました。

交流の中では、「中国」という言葉で、安易に中国をひとくくりにしてはいけない、と強く感じました。中国は、言うまでもなく、非常に広大です。そして、各々の地域には各々の言語があり、各々の文化があります。北京と上海と福建と広東は、様々な点において全く異なります。たとえば、言葉も一つではありません。私は、台湾に興味を持って、授業で福建語を学んでいますが、福建語は標準語とは発音の点で大きく異なります。広東人の友達から、少し広東語を教わりましたが、広東語も標準語とは大きく異なります。

同時に、「中国人」という言葉で安易に中国人をまとめてはいけないということも深く理解しました。極めて当然のことです。しかし、いま、その当然のことが当然ではありません。よく日本のマスメディアでは「中国人は・・・である」というように、中国人をひとまとめにした文章が見られます。しかし、本当はそのような文章は無意味です。日本に悪い人もいれば良い人もいるのと同じように、中国にも様々な人がいます。

最も大切なのは、個人を見ることです。何人かどうか、ということに囚われず、一人一人の目の前にいる人と向き合おうとすれば、自然と、分かり合うことができます。

これまで関わってきた交流イベントは、本当に楽しいものでした。しかし、イベントを運営する中では日中交流の難しさも実感しました。とくに大きな問題だったのは、日中交流に対する日本人学生側の無関心です。中国といっても、興味がわかないという人がほとんどでした。あるいは「面白くなさそう」「よく分からない」という意見もよく聞きました。

日本のマスメディアは、よく、中国の負の側面に言及します。とくに、政治や環境などの面で問題を抱えているということを強調します。あるいは、経済的な話題の中で、中国のことを事務的に取り上げます。だから、中国に対するマイナスなイメージや無関心が蔓延するのだと思います。

しかし、隣国なのだから、決してお互いを無視し合うことはできません。

国家の単位では交流が硬直していたとしても、個人の単位からより良い日中関係を築いていこうとすることが大切です。その際には、親しみやすい文化の話題から日中交流をはかっていけばよいのではないか、と私は考えています。たとえば、いっしょに料理をつくり、食べたら仲良くなることができます。

あるいは、カラオケに行き、中国や日本の歌をいっしょに歌えば仲良くなることができます。楽しくて気軽な交流こそが全ての入口です。

ただ、本当に細かい点にまで気を配り合い、様々な問題をともに深く考えていくためには、相手の言葉を理解することが必要になります。交流の上では、言語の差異が大きな壁だという意見も多く聞きます。日本語を学ぶ中国人留学生は大勢いますが、中国語をある程度理解することができる日本人は多くありません。大きな不均衡が存在しています。その言葉の問題を解決するのは容易ではありません。

言語習得の上でまず大切なのは、相手のことを理解しようとする気持ちです。その気持ちを生み出すのは、偶然が生み出すかけがえのない人との出会いです。出会いは簡単につくりだすことができるものでもありません。しかし、だからこそ、出会いを作り出そうとすることは大切であり、必要です。これから　日中交流をさらに広げていくために、私は、周囲に出会いを生み出すために努力していきたいです。

中村　佑

中国との 20 年間の交流を振り返って

「Panda 杯全日本青年作文コンクール」の募集要項の「【応募資格】16 歳～35 歳の日本人」という文言が目にとまり、思わず筆を握りました。その文言を見ていて二つのことに気づいたからです。一つは、16 歳から 35 歳までという応募資格の年齢範囲と、16 歳の時に初めて中国を訪ねてから 35 歳になった今日まで続く私と中国との交流期間とが一致していたことです。私の中国との交流は 20 年目を迎えました。もう一つは、「『青年』作文コンクール」の応募年齢の上限が 35 歳であり、現在 35 歳の私は間もなく青年期を終えることです。中国交流 20 周年と青年期の終わりという二つの節目を迎えるにあたり、私と中国とのこれまでの交流及び今の日中関係に対する思いを文字に残したいと考えました。

前述の通り私は 16 歳の時に初めて中国を訪れました。当時私の住まいのあった武蔵野市は、市内在住の高校生を海外に派遣し、派遣先の人達と交流を行う事業「青年の翼親善使節団」を定期的に実施しており、私はその使節団に参加して中国を訪れました。

対岸の見えない程広い上海付近の長江、今にも動き出しそうな迫力の西安の兵馬俑、そして果てのない北京の万里の長城等、多感な時期の私はいずれの見学先にも圧倒され、興奮して眠れない日が続きました。

その中でも特に深い印象を残した出来事は、北京でのホームステイでした。私は、日本語を学ぶ高校生のいる中国人の家庭で４日間を過ごしました。

ホームステイ初日は、自身の生活との相違点ばかりが目に付きました。例えば、言語の違い、トイレや浴室の仕様又は使い方の違い等です。こうした違いを、私は不便だと消極的に捉えていました。

二日目になると、自身の生活との共通点も見えるようになりました。家族団らんの温かい雰囲気や、高校生の持つ思春期の悩み等は日本も中国も同じでした。共通点の発見をきっかけに私はホームステイ先の家族に対して親しみを感じるようになりました。同時に、相違点を消極的に捉えてしまう原因にも気づきました。即ち、日本における自身の生活が「常識」であり「当たり前」であるという思い込みがあったのです。郷に入っては郷に従う。ホームステイの残りの時間を、私は中国人になったつもりで生活してみることにしました。

私は、ホームステイの日々を、北京観光や卓球、中国将棋等して過ごしました。その間ホームステイ先の高校生とは、家族のこと、学校のこと、友人のこと、将来のこと等を延々と語り合い、いつの間にか私達はすっかり親しくなっていました。言語や文化、習慣、民族等は違っても、友情は育むことができるものです。そのことに気づいた時の喜びを今でも忘れることができません。このホームステイの経験こそが20年間の中国との交流の原動力になっています。

時は流れ、2012年9月から1年間、私は中国政府の公費留学生として、湖北省武漢市の武漢大学法学院に留学しました。前述の初回の訪中後も中国の旅や中国人との交流を続けた私は、いつしか中国で生活してみたいと思うようになりました。そして縁があって、中国で留学生活を送る機会を得たのです。

私が留学生活を始めた2012年9月、「島」をめぐる問題が起きた等に伴い日中関係は政治を中心に非常に緊張していました。安全への配慮から留学先の大学は、日本人留学生に対し、外出や中国人との接触を極力控えるように求めました。また、いくつかの商店では日本人の入店を禁止するとした張り紙を出していました。中国人との交流を目的に留学したにもかかわらず、その思いと全く異なる現実を目の当たりにした私は、胸が痛むという言葉の意味を初めて理解したように感じました。

一方で、私達日本人留学生の状況を心配してくださる中国人もいました。むしろ、私と接触のあった中国人の殆どが私達日本人留学生の生活を心配してくださいました。特に、放課後に毎日のように通った大学の近くのミルクティー店の店主家族は、毎日私の話を親身になって聞いてくださり、悩みがある時は励まし、困ったことがある時は助けてくださいました。その店主家族は、私の武漢の家族とも言うべき存在になりました。

日本への帰国が間近に迫った日に、その店主家族を始め商店街で頻繁に顔を合わせていた人達が送別会を開いてくださったことは、一生忘れないことでしょう。留学を通じて、日中関係が政治を中心に冷え込んでいようと、中国人と日本人は信頼関係を築くことができるのだと実感し、その実感と同時に胸の痛みは消えました。

今回紹介したホームステイや留学等を通じて、私にとって中国は多くの友人の住む親しい隣国となりました。

一方で、毎年実施される内閣府の「外交に関する世論調査」によると、中国に親しみを感じないという回答が近年8割を超える等、日中関係は政治のみならず大衆のレベルにおいても良いとは言えません。この調査結果は両国の交流の不足を示していると私は考えます。

近年、報道やインターネットを通じて、相手国の情報が多く伝わるようになりました。それにもかかわらず、相手国の人と知り合う機会は依然として限られています。そのため、相手国の人の考え方を知ることもなく、異質なものとして「親しみを感じない」のでしょう。しかし、私がホームステイで経験した通り、人は相違点があっても友情を育むことができます。

こうした状況を改善するため、両国は対面型の交流を増やすべきです。私が留学で経験した通り、国家間の政治関係がどうであれ、私人間で信頼関係を構築することはできます。そして私人間の信頼関係の広がりこそ日中の友好関係の基礎になると私は考えます。

次の20年も私は中国との交流を続けていきます。今後は私自身だけの交流に加えて、中国人と日本人との交流の輪が周囲にも広がるよう活動していきます。

鈴木　美葉

上海の朝市

夏休み、母の実家である上海へ行った。78 になる祖母は上海市中心地のマンションに住んでいる。そこで私の印象に最も残ったのは朝市だ。

朝、私は目が覚めた。窓の外から聞こえる市場の喧騒。窓に歩み寄り、身を乗り出してみる。眼下に広がったのは実に鮮やかな光景だった。たくさんの人々の往来。スイカを積んだトラック。野菜をのせたカゴを担いでいる若者もいる。

そのとき背後から祖母に声をかけられた。「朝市に行かないか。上海人の一日はここから始まるのよ」

時計の針は５時 45 分をさしている。私は祖母の後ろについて朝市に行くことにした。

上海の朝市は驚きの連続だった。道路の両わきに広げられた出店には、赤、黄、緑と果物が並べられ、売り物の魚は水漕で泳いでいる。器にはなみなみと水が張ってあり、エビが何度か水面から跳びあがった。その傍らで威勢のよい声を売り子が張り上げている。その光景には活気があふれていた。

白い湯気が向かいの屋台からあがっている。興味を抑えきれず駆けよってみる。蒸籠が持ち上がって姿を現したのは、できたての小籠包だ。日本でもよく知られた上海名物である。蒸籠を持ったまま店のおばさんは笑う。食べていってよ、と汗をぬぐった。

祖母は店先の椅子に腰かけて注文をした。私も椅子に座る。周りを見渡してみると、たくさんの人々が朝食をとっている。私と同じ学生から、サラリーマンの男性、祖母のような背中の曲がったおじいさんも皆おいしそうに点心を食べている。

「おまちどうさん」。でてきた小籠包にかぶりつく。薄い皮が破れてでてきた汁を慌ててすする。祖母はやけどしそうになったのをごまかして笑った。

この市場で特に目をひくのが、色とりどりの野菜だ。ここで売られている野菜は上海近郊の農民が毎朝収穫しているものだそうだ。祖母は、長々としたつやのあるナスを手にとった。

「ほら、みてみなさい。ナスの表面に水滴がついているでしょう。きっと朝露ね。新鮮だわ」

祖母は満足気にほほえむ。それをみた野菜売りのおじさんは得意気な表情になった。本当に人情のある街だと思った。

とにかく上海のスイカは安い。五〇〇グラムで一元だ。祖母は、王さんという青年のところへスイカを買いに行った。祖母の話によると、王さんは二十歳で地方から来たそうだ。母親は病気でこの付近の大学病院に入院しているという。王さんは母親の看病をしながら金を稼ぐためにすいか売りの手伝いをしている。

トラックにもたれかかった王さんの手には英単語帳が握られていた。彼は照れくさそうに話してくれた。

「実は来年、大学の受験をしようとおもっているのです。将来はエンジニアになりたいから」

どんな困難があっても夢を失わずに一生懸命に生きていくこの青年の姿を見て、私は本当に感動した。

朝市の最終地は公園だ。公園には朝日がさしこんでいる。石段におかれたラジカセから流れる優雅な中国音楽にあわせて人々は太極拳をする。

木陰には、二胡をひく人もいれば囲碁をうつ人もいる。上海の公園は人々にとって体を動かす場所であり、大切なコミュニケーションの場でもあるのだ。

祖母は買い物カゴを木の下に置いて太極拳をする人々の中に加わった。私はベンチに座った。目の前にある花壇は小さいながらもよく手入れがされている。バラの花の微かな香りがした。頭の上、ずっと高いところから蝉の声がする。

上海の朝市は、中国の縮図だと思う。中国は他の途上国と同じく、環境問題や都市と農村部での格差問題を抱えている。それでも意志をもって前向きに生きてゆく人々の姿は、私に深い感銘を与えた。

私は、上海の朝市が大好きです。

吉澤　法華

出会いから生まれた変化

今年７月のある日のことでした。

「母さん今度の日曜日、中国人留学生とブルーベリー狩りに行くけど、のりかも一緒に行ってみる？」

母の問いかけた一瞬迷いました。なぜなら私は中国語が話せないし、中国人留学生と交流したことがありません。それにテレビなどのメディアで取り上げられている中国に対する私のイメージは正直言ってあまり良いとは言えなかったからです。

母は数年前から独学で中国語を学んでいます。中国人の友人ができたことで中国に親しみを感じ地元の日中友好協会に入りました。今回も友好協会が主催するブルーベリー狩りでした。

私は英語を話せるわけではありませんが英語の勉強が好きで、将来留学してみたいと思っています。でも親元を離れ外国で勉強することに不安も感じています。だから留学生に直接会って、外国で勉強することを不安に思わなかったのか聞いてみようと思いました。

ブルーベリー狩りには 15 人くらいの留学生が参加していました。実際に会ってみるとみんな日本語が上手で私が中国語を話せなくても全く問題はありませんでした。それにみんなとても親切で優しい人達でした。

ブルーベリー狩りの後の懇親会で隣に座った二人の留学生のお姉さんに私は留学に対して不安はなかったのか聞いてみました。

「もちろん来る前は不安があったけど、実際に留学してみたらとても楽しいよ。機会があったらぜひ留学してみたらいいと思うよ」と、二人のお姉さん達は話してくれました。

その後一人一人自己紹介やブルーベリー狩りに参加した感想を話す時間がありました。

その中で一人の留学生のお姉さんが「今日は私達との交流会を準備して下さいましてありがとうございました。皆様との楽しい交流は異国の地に暮らす私達に温かさを与えて下さいました。日中友好に力を尽くしている皆様の姿を見て大変感心しながらも私は自分の責任の重さを感じました。これからも日本の文化をしっかり勉強し、皆さんとの交流を深め出来るだけの力で日中友好のために頑張っていきたいと思います。」と話しました。

私は衝撃を受けました。今まで考えもしなかったことです。留学するということは、自分の勉強を頑張るだけではなく親善大使のような役割を果たすことになるのだということを私はこの言葉を聞いて初めて知りました。

ブルーベリー狩りで留学生のお姉さん達と仲良くなり、私は中国や中国の人に対して親しみを感じ、もっともっと交流したいと思うようになりました。

８月に仙台市で開催される七夕祭りにゆかたを着て中国人留学生と交流する「ゆかた祭り」という企画があると母から聞いたので、私もぜひ参加させて欲しいと頼み参加できることになりました。「ゆかた祭り」は 11 人の中国人留学生と 18 人の日本人女性がグループごとに分かれて行動しました。

ゆかた姿の私達は一緒に茶道を体験したり、大きな吹き流しの下で写真を撮ったり、中華料理店で昼食を食べたりしながら、たくさんお話をしたりしました。私はあっという間に心の距離が縮まり仲良くなることができてとてもうれしかったです。そして、もし自分が中国語を話すことができたら留学生の方々との交流がもっと楽しくなるだろうと感じました。

私の出会った留学生の方々は皆さん優しい人ばかりで、日本のニュースで受ける中国人に対するイメージとは全くといっていい程違います。日々の生活で直接お互いの国の人と関わる機会がないだけで、実際に会って話して同じ時間を共有すれば、私達はすぐに仲良くなることができるのだ、と私は思っています。

出会いをきっかけに私の中の中国は大きく変わりました。そして私も少し変わりました。

最近私は中国語の勉強を始めました。今度中国語の朗読の大会に参加することにしています。まだ勉強を始めたばかりでいつ中国語が話せるようになるのか分かりませんが、留学生の方々との交流を続け機会があれば中国に行って現地の人達と中国語で交流してみたいです。その時には「小さな親善大使」という役割があるということを自覚して行動したいと思います。

大友　由香

「中国人にときめこう！」

私が中国に初めて行ったのは、大学２年生の時、北京に語学研修に行った時のことだ。その時に中国の元気さや明るさに強く魅かれた。それから観光で上海に、友達に会いに広州に行ったことがある。

少ないながらもそれらの経験、また日本で出会った中国人の印象から、私の目に映る中国と言うものを表そうと思う。

まず印象強いのは、中国人は「吃饭了吗（ご飯食べた？）」と本当によく言うことだ。これが彼らの挨拶だとは聞いていたけれど、まさか会うたびに言われるとは思わなかった。

そして食べたと言えば、「よかった」といい、食べてないと言えば「じゃあ食べに行こう」という。なんて言い挨拶何だろう、と私はいつも思った。お腹をすかせているのと、一人でいるのが重なったら誰だってとても孤独な気持ちになる。この挨拶はそんな一人ぼっちの気分を瞬時に嬉しい気分にさせる言い挨拶だ。

けれど、ご飯に行こうと言われて、軽い気持ちでうなずくと大変なことになる。中国人は「たくさん」が大好きだ。ご飯ももちろんたくさん。それも食べきれないほどに本当にたくさん用意するのが好きだ。相手が喜べばいい、楽しい気分になるならいい、盛大にやろう、という彼らの気持ちのよさは誰かに教わらなくてもよく伝わってくる。友達をたくさん呼ぶのも好きだから、私が中国人とご飯の約束をするとなんだかいつも宴のようになった。もちろん、これは私がお客さんとして扱われたこともあるだろう。だが、それだけでなく中国人独特の「にぎやか好き」な性格の表れでもあると思う。

また、中国人は家族をとても大切にする人たちだと思う。北京で一番仲良くなった友達の夢は、「お金を貯めて、弟を大学に行かせてあげたい」ということだった。自分は行けなかったため、また、弟は

勉強が大好きだから、それを応援してあげたいと言っていた。その子と同い歳の時、私は自分のほしいもの、やりたいことの事ばかりを考えていたのに、と驚いた。

彼等と話して驚いたことはもう一つある。中国の今の若者の親は子どもに暴力をふるわないことが一般的であることだ。中国人の友人たちは、全員子どもに暴力をふるうなんて信じられないと口をそろえて言っていた。日本は世界でもトップクラスに豊かでお金持ちの国であるにもかかわらず、子どもの虐待事件が毎日報道されている。中国人はたとえ貧しくても疲れていても家族をとても大切にする。中国人のように家族を何よりも大切に出来る心を見習うべきだ。家族のためなのか、自立心が強いのか、中国人は家を出る時期が早い。家を出て都会の真ん中で生活する中国人の若者と多く出会った。「みんなこんなもんだよ」と良く言われた。

なぜか私は、中国人の若者一人の存在が社会の中でひどくちっぽけに感じる時がある。彼らが孤独に打ちひしがれようが、涙を流そうが、思い通りに行かなくて喚こうが、誰も気にとめないくらいに彼らの存在はちっぽけな気がする。経済が著しく発展しているから？　若者の影響力が弱いから？　私はそうではないと思う。あまりに人が多くて一人一人の存在が埋もれているのだ。何もしないと埋もれてしまいそうな世界。だからこそ、中国人、特に若い中国人のエネルギーはとても大きい。精神は強い。勝気、攻めの姿勢、積極的、これらの言葉がよく合うと思う。だれもが夢を持っている。幸せを夢見ている。もちろんその幸せは、人それぞれの形があるが、私は彼らのそんな力強さがとても好きだ。

日本で出会った中国人の友達も、物怖じしないような性格の子ばかりだった。吸収力がすごかった。努力も惜しまない。勉強、仕事、相手との会話での相手への興味。全てに一生懸命。中国人は世界中のどこでも生きていける、と言っている人を知っているが、その理由はこの一生懸命さにあると思う。

けれども、同時に中国人は、世界のどこでも固まりやすくて、すぐにチャイナタウンをつくってしまう。家族や、家族同然の仲間たちを大切にする気持ちが強いからだろう。知らない世界で同じ母国の、同じような境遇の人がそばにいたらどれだけ心強いかは想像に難くない。

中国の人たちは一度受け入れた相手を本当に大切にする。一度、彼らの仲間に入れてもらえたら、本当に毎日が楽しくなる。それなら、もう少しだけお互いがオープンになったらみんなとっつきやすいのではないかと思う。世界も中国人たちも、だ。これからは相手がオープンになるのを待つだけでなく、世界中も彼らにオープンになることが必要だ。

中国人のパワフルで明るい性質を世界中が体験する日を早く見たい。中国の煩雑で騒がしい第一印象を見事に塗り替える、あの瞬間を体験すれば、多くの人が彼等の優しい空間に居心地良くなってしまうことだろう。

岡田　茉弓

日本人が知らない桃源郷

なんと埃っぽい国なんだ……。

これが中国に３月初旬から２週間ほど天津、北京で過ごした私が抱いた中国という国に対する印象だった。

雨が降ることはめったにないらしく、土は白っぽく、少し風が強いと昼だというのに夕方のように外の景色がかすむ。日本から大量に持ってきたマスクは息苦しくなるのが嫌であまりしたくなかったが、北京に来た日は「さすがにこれは……」と、観念してマスクをつけなければいけないほどひどかった。

日本のしとしとと恥じらうように降る雨音がなつかしかった、目が痛くなるような緑がなつかしかった、私は異国の都で、故郷のなんでもない風景が恋しくてたまらなかった。

中国に来て観光や語学研修に忙しくて思い出す暇もなかった日本について、私は数メートル先もかすんで見える景色を窓辺越しに眺めながら思い出していた。

もちろん北京、天津についてネガティブな感情ばかりではない。特に食に関しては、できることならば日本にすべて持ち帰りたいとさえ願ったほどだ。

天津にいたころの朝、私は決まって粟のおかゆと卵と漬物を食べていた。粟のおかゆは南方に行くとお米に変わった。しかし、あのあっさりしてつるつると口に入る感触は朝にぴったりで、なおかつ脂っこい中華料理を食べていても粟のおかげで私は腹を下すといった経験をしなかった。中国から帰国して半年経った今でもなつかしく、食べたいと切に願っている。

しかし、正直中国という国は美しいかといわれれば、北京にいたころの私は苦笑いしながらNOといっていたと思う。

その無秩序で、ぼんやりとしている雰囲気が嫌いではないが、好きになれなかったのだ。

格式ばったものが好きなんじゃない。むしろ嫌いだ。でも、私が欲しているものをこの国に求めていけない気がしていた。

それから私は北京よりさらに埃っぽい西安にむかい、その後成都についた。

成都についたのは真夜中で、この土地がどういったところかを十分に確認できなかった。

早朝、朝食といって配られた牛乳と中国にきてから久方ぶりの再会であるパンをほおばりつつ楽山大仏に向かった。

空気は北京よりマシだなと、ぼんやりとした頭で考えながら、目の前に広がる澄み渡った空気と、どんよりした空を眺めていた。

しばらくして景色は町から田舎に変わった。

そして、そこで見たものを私は今でもわすれられない。

地面が黄金色に光り輝いていた旅の疲れでしぼしぼとして脳と目を私は必死にさまし、改めて目の前の景色を凝視した。それは、一面の菜の花畑だった。

日本で見るような道の端のお飾りではなかった。村という村が菜の花畑に覆い尽くされていたのだ。

菜の花はここまで力強く、可憐で、気品あふれている花だったのか……

地表を覆いつくし圧倒的な存在感を示すのに、凛としている、それなのにどこか愛らしさを残している一面の菜の花畑はこの世のものとは私は思えなかった。

そんな菜の花畑を時折、人影が通り過ぎていく、その姿は菜の花に覆いつくされるのでも、菜の花を威圧するものではなかった、ただただ自然とそこにいた。

美しかった。あまりにも美しい景色だった。

ああここは桃源郷なんだ。

私はそう納得した。水にぬれて照り輝く木々、一面の美しい菜の花畑、そしてその中で一歩、一歩をゆっくりと、でも確実に歩み続ける農民の姿は、いつか読んだ漢文の景色にそっくりだと思った。

私はその景色を見た瞬間、中国という国の印象ががらっと変わった。
埃っぽくて、精気がない国という印象から、みずみずしい自然とその中で自然に威張りちらすわけでも、遠慮しすぎるわけでもない人々がいる国という印象になった。
私はここまで美しい景色を日本はもとより、韓国やアメリカでも見たことがなかったし、ないだろうと確信した。
私が心の奥底でこの国で欲していたのはこれだったのか、と私はわかった。
素朴でありながら、力強い風景なのだと。
それから私はこの国を離れるのが惜しくてたまらなかった。
美しい景色と、ゆったりとした時間、おいしい料理を捨てる気にはなかなかなれなかった。
４月になろうかなるまいかという時、私は消費税増税前の日本に帰って行った。
中国の旅の終わりはあっけなかったが、心に残したものは重かった。
もし、私の目の前で中国は汚いと嘲り笑う人がいたら私は微笑みながらこう答えようと思う。
「春、あたたかくなり始めた成都に行ってください。あなたは決して忘れることの景色に出会うから」と。

小川　智之

私の心に映った中国と日本の現在

最近、大きな書店へ行くと、中国(あるいは韓国)に対して明らかに悪意を持って書かれた本をよくみるようになった。中国が日本へ攻めてくるとか、南京事件は捏造だといったことが書かれている場合が多い。よく売れるのだろう。中国の人々はみな悪者と言わんばかりである。
昨年九月、私が香港大学を訪問したとき、一人の中国人と出会った。
私は大阪大学から約 100 万円の資金援助を受け、同級生 5 人とともに香港のトップスクール（香港大学、香港科技大学、香港中文大学）の教員や学生に対し約二週間にわたって取材をしていた。研究テーマは「阪大が世界 10 指に入るには～香港の大学はなぜ強いのか～」。近年、大学ランキングで躍進を続け、アジアでも際立った存在感を見せる香港の大学の強さの秘訣を探ろうというのがその目的だった。
彼女と出会ったのはちょうどその一環で香港大学文学部准教授の中野嘉子先生に取材していたときのことである。彼女は中野先生の教え子の 1 人で、流暢な日本語を話していた。本人が自分で中国人であることを言うまで、私は彼女が中国人であることには気づかないほどだった。
少し話が逸れるが、香港に来ている中国人留学生は極めて優秀だ。香港大学の場合、中国の統一試験「高考」で北京大学をトップクラスで入学できる点数が一次試験の足切りの点数(！)となる。300 人ほどの枠に 1 万人を超える受験生が応募するのだ。もちろん彼女も高考で吉林省 1 位だったというから文句無しのスーパーエリートである。(ちなみに吉林省の人口は約 2700 万、日本の近畿地方の人口が約 2200 万であることを考えるとその規模がわかる)
そんな彼女に将来の進路を聞いてみた。文字通り中国の未来を背負って立つ彼女が、どんな道を選ぶのか純粋に気になったのである。彼女は「良品計画」という会社から内定をもらっていて、そこに就職することに決めたと教えてくれた。「良品計画」といえば「無印良品」のブランドで有名な日本企業である。

私はすこしあっけにとられてしまった。というのも、私が彼女の進路として真っ先に予想したのは、高待遇なことで有名な欧米の金融機関だったからである。実際、中国から香港に来る留学生は一攫千金を夢見て、ゴールドマンサックスやJPモルガンチェースといったアメリカの金融機関を目指す場合が多い。もちろん中国本土から香港大学に入学してきているということは、彼女は英語をネイティヴ並みに話せるわけで、アメリカの金融機関に入ることもそう難しくはなかったはずである。もちろん、彼女ほどの人材であれば中国へ戻ってもいくらでも仕事はあるはずだ。無印良品は中国・香港において、ユニクロと並んで最も成功している日系小売業者であることには間違いないが、中国の宝とでも言うべき彼女の就職先としては意外だった。

彼女はなぜ日本企業を選んだのか。

彼女が言うには「日本が好きだから」、それだけだという。どうやら最初から金融方面には関心がなかったようで、自分もよく利用するという無印良品を選んだらしい。幼いころから日本のドラマやアニメに親しみ、日本語の勉強もその延長にあったそうだ。昨今の日中関係は領土をめぐる問題もあり、とても良好といえる状態ではない。それでも彼女のように「日本が好き」であると中国のエリートが堂々と言う姿は、私には新鮮に映った。その後香港大学に来ている留学生のパーティーに参加したが、その他の中国人学生もまた日本、あるいは私たち日本人に対して非常に好意的であった。日本のアニメやマンガ、ドラマに関しては私よりよっぽど詳しいくらいである。

正直なところ、彼らと話す前には歴史問題やら領土問題について英語でまくしたてられたらどうしようかと思っていた。しかし、それらは全くの杞憂であった。少なくとも中国の若いエリートたちは非常に温厚で人格者であり、また日本に対して一定の魅力を感じているようである。彼らを通じて私の目に映った中国は、日本の週刊誌に書かれているような姿とはまるで正反対の、非常に穏やかで人間的なものだった。

多くの政治家を含め、近年の日本においては何かと中国をやり玉にあげる風潮が見られる。確かに、中国の政治力学に於いて、カネとコネが重要な役割を占めているのは事実であるし、国家防衛の観点から見れば中国は「仮想敵国」なのかもしれない。しかし、日本にとって中国は重要な隣人であることを忘れてはならない。彼らは我々が想像している以上に中国の人々は人間的情緒にあふれた人々なのではないかと思う。両国の人々が各々感情的な議論に走ってしまうのはある程度仕方ない面もあるかとは思うが、それでも互いを理解しようとする努力は必要ではないだろうか。戦略的に考えても、不況にあえぐ日本にとって巨大なマーケットとしての中国は到底無視できるものではないし、歴史的観点から見れば、日本が中国から受けた文化的影響の大きさは計り知れないものがある。今の日本人には、昨今の風潮に惑わされることなく、「近くて遠い国」中国の実際の姿を理解しようとする努力が必要なのではなかろうか。

石森　瑞希

わたしの目に映る中国

私は中国という国に対し、惹きつけられる部分があると感じる。それは初めて実感したのは、私が年少の頃にある作品との衝撃的な出会いがあったからだ。私が当時通っていた小学校の南校舎２階の第１図書室の隣に、普段は鍵のかけられた入ることのできない秘密めいた教室があった。ドアには日中両国

の国旗が交差し掲げられた装飾があり、ドアのガラスの向こうはいつもカーテンで閉じ込められ何も見えない。その秘密めいた教室というのが、中国文化交流室だった。

私は図書室前の廊下を通る際、だいたいぼんやりとその部屋のドア飾りや黒のカーテンを眺めては、物思いに耽っていた覚えがある。なぜなら、その場所は謎が多い未知の空間に思えたからだ。私はその後、その場所へ踏み入ることになる。今思えば後にも先にもたった一度の入室であった。

それは小学３年生の頃のことで、その年はちょうど中国からわが校へ青少年使節団が来た年でもあった。中国の生徒や留学生との交流会が催された。後日、担任教師はクラス全員を率いて、秘密の部屋である中国文化交流室へ連れて行ってくれたのだ。何かと気にかかり、入りたかったその部屋についに入ることが叶ったと当時の私はわくわくした気持ちでいっぱいになった。

母校の小学校ではそれまでにも何度か中国との交流があったようで、過去の交流の軌跡がそこにはあり、そこで当時私と同じくらいの年頃の中国の子達がかいたという書や水墨画の作品が展示を見たのだ。それらの作品は 8 歳ほどの児童がかいたとは思えない作品ばかりであった。私は小学１年の７月から書道を母から習っていたが、私にはこのような作品は到底書けない、適わないと思わされた。中国の小学児童の文化レベルはこれほどまでにも高いのかと衝撃を受けた。作品の第一印象は、大人びた雰囲気と垢抜けた線質だ。しかし、言葉にはし難いもっと凄みのあるものであった。内に秘めた迫力にも感服した。さすが本場の中国はレベルが違うとただただ感心した次第であった。そして、中国という国に対し、文化という力を持った素晴らしい国だと憧れと敬服の念を抱いた。

できることなら、あれらの作品をまた見たいと願う。大学２年になった今の私が見たならどう感じるであろうかなどと考えることもある。だが、それはもう叶わないのだ。母校のホームページを開き、教室配置図を調べてみたところ、かつて中国文化交流室はイングリッシュルームと名前を変えていた。とても残念なことだ。中国という存在が遠くなってしまったように感じた。記憶はどんどん薄れていき、どのような作品であったのか、あの出会いから 10 年程経った現在でははっきり思い出せなくはなったが、あの時抱いた衝撃と感動は今でも書の原動力になっている。書の方向性を見失ったり、スランプに陥った時などには、その時に感じた気持ちを思い出す様にしている。

私は小学３年生の時の中国の児童の作品との出会いがのきっかけの一つとなり、今では書道を本格的に学べる大学へと進学し、これからも中国への憧れや敬愛の胸に書道と新たに始めた中国語の勉学に日々精進していくつもりだ。私は大学１年の９月より、留学生を対象に１対１で日本語を教えるという日本語教師のボランティアを始めた。私の担当は同い年の中国人女性の留学生である。その留学生を初期から担当しており、伝えるということの難しさと喜びを純粋に感じた経験となった。それに交流する中で、中国の良さを感じつつ、日本の良さを再認識することもできた。その留学生とは互いに苦難を乗り越えてきたパートナーであり、普段は先生でもあり友人である。このボランティアからたくさんの事を学ばせてもらうことができた。

私は、母校である某公立小学校の中国文化交流室がイングリッシュルームに変わっていたことをとても悲しく思う。英語も大切だが、日本は常に中国の影響力下にあり、日本と中国は切っても切り離せない関係であり重視しなければならないと考える。だからこそ、私はこれからも日中の交流や、これからもやって来るであろうさまざまな出会いを大切にし、生きていきてゆきたい。

伊藤　洋平

わたしの目に映る中国

私が中国へ留学に行ったのは、「島」をめぐる問題が起きた 2012 年 9 月 11 日だった。中国語がほとんどわからなかった私は、中国の地下鉄で流れるテレビで鳩山首相の映像が出ているのを見て、「普段から中国のテレビでは日本のことがよく放送されているんだな」と全く見当はずれな感想を抱いて見ていた。留学中、私は中国語の勉強に集中しようと日本の情報は一切得ようとしなかった。入ってくる情報は学校の食堂にあるテレビのニュースからだけで、中国人と同じ質の情報が入っていたと思う。そのような情報からでも「島」をめぐる問題は尋常ではないということは感じられ、日本人とばれることに不安を感じ、日本語を話すことはもちろん、日本語なまりにならざるを得ない中国語を話すのもためらったものだった。幸か不幸か私の大学には日本人が一人しかおらず、普段の生活で全く日本語を話すことはなかったが、いろいろな手続きでパスポートを見せたり、外出したりする機会が多かったので、そのたびにびくびくしていたのも事実だった。

中国語が話せるようになるにつれて、中国人と接する機会が増えていった。そこで感じたのは、日本人への抵抗感がないということだ。むしろ、そのような時期だったからこそ、日本人への関心が高かったと言えるかもしれない。そういった中でできた中国人の友だちから言われた一言が非常に印象に残っている。「君と会うまでは日本に対して全く興味がなかった。でも、君に会ってから日本に関心を持つようになったし、日本語を勉強してみたいと思ったよ」と。彼は今、留学に向けて勉強に励んでいる。

もう一つ、留学中のエピソードを紹介したい。中国では公園で朝夕にいろいろな活動が行われている。私はもともと太極拳に興味があったので、北京に着いて 3 日後には公園に行き、太極拳をやっている人たちにまじって見よう見まねで参加していた。公園で運動している人の多くは年配の方々で、日本に対して特別な思いを持っているのではないかと思ったが、逆だった。「テレビではあのような報道がされているが、国の問題と個人の問題は別。中日友好のために太極拳を教えるよ」と、いつもの練習が終わった後に先生が教えてくれ、私の参加をきっかけとした太極拳を学ぶグループができたのだった。

１年間という期間の決まった留学で、帰国の際には非常に名残惜しかった。あまりに名残惜しかったので、帰国後数カ月してから突然、留学先に行ってみたことがある。突然の私の出現に公園の人たちも、大学の友人、先生たちも驚いてはいたものの、そこが中国の人たちのすごいところで、太極拳では練習終了後のレッスンが実施され、大学では歓迎会を開いてくれた。中国の人たちは一度友人となった人に対して非常に温かく接してくれ、このような突然のことにも臨機応変に対応してくれる。これは、私が留学を通して体感した中国人の特徴だと思う。それがわかっているので、私自身も急に訪問しても大丈夫だろうという安心感がある。一方で、突然のことなので、予定があったらそれはそれで仕方がないと割り切れるため、変に気を遣う必要がない気軽さもある。こういった付き合い方ができるのは中国ならではだ。

中国人の臨機応変さは日本に帰国してから特に感じた。日本に来る中国人のボランティアガイドをやったことがあるが、工程表通りに進むことはまずない。当日会ってから、工程表はなかったかのように、こことここに行きたいと言われたり、同じような場所だとわかると、当初の予定はなくして、違うところに行きたいという要望が出てきたりする。お寺は１つ見れば十分で、多少異なるからと言って、２つも３つも見る必要はないらしい。留学中に中国人から頻繁に聞いたのが、中国は大きく、人が多いとい

うことだった。地域によって特色が大きく異なる中国にしてみれば、ちょっとした違いに対して目を向ける習慣はあまりないのだと思う。これはどちらが良い悪いというわけではなく、まさに文化の違いの面白さで、お互いが接するときに理解しておくべきポイントの一つだと思う。

中国の人口は日本の 10 倍で、面積は 25 倍。これを数字としては理解できる。しかし、実際どの程度なのかというのは実感してみないとわからない。一つ例を挙げてみると、日本ではゴールデンウィークや正月に交通機関が混雑することはよく報道される。これは見方を変えると、交通機関以外の混雑はあまり目立たないということだ。それが中国では、交通機関以外にも観光名所などが人で埋め尽くされた状態が報道される。日本では観光名所に人がたくさんいる報道というのは、賑わいがあって良いという意味合いがあると思う。しかし、中国での報道は賑わいを通り越して、これだけ混んでいるから行かない方が良いと示唆しているかのようだ。

帰国してからはほかの日本人の目に映る中国を通して、改めて自分の中での中国を認識することが多い。帰国後すぐに気づいたのは空気の問題だ。中国でも日本でもＰM2.5 の問題が本格的に報道されたのは、留学中の冬のことで、思い返してみるとそれよりも前から曇っていることはよくあった。それを知らない私は「朝もや」のかかった良い雰囲気の中で太極拳ができるな、などと感じていたものだった。実際に報道でそのことを知ってしまうと、マスクつけるようにしたが、実際にマスクをしている中国人はほとんど無く、そのことを帰国後に日本人に伝えると、報道との違いに驚いていたようだった。

留学を通して私の目に映る中国は大きく変化を遂げた。そして、帰国後もそれは変化し続けている。ただ、私の見てきたものも大きい中国の中でのほんの一部に過ぎない。日本も場所や人によってさまざまであるように、中国はそれ以上に多種多様なものが混在している。そのことを認識することが中国を理解する第一歩になるのではないかと思う。